

出島山下貝塚

——宮城県牡鹿郡女川町出島——

第二次調査概況報告書

1 9 7 1

出島山下貝塚第二次調査報告書

目 次

I 出島の現況と遺跡の位置	37	e 角製尖頭工具	45
II 本貝塚発見の動機	38	f 筥状骨角器	"
III 調査の経過	39	g 骨製ペン先状刺突具	"
IV 各トレンチの層序と出土品	42	h 鹿角製品破片	"
1. IVAトレンチの層序と出土品	"	i 加工痕の認められる鹿角片	46
① IVAトレンチの層序	"	E 貝製品	"
② 出土品	43	a 貝輪	"
A 自然遺物	"	b 貝輪	"
a 貝類	"	2. IVCTレンチの層序と出土品	47
b 哺乳類	"	① IVCTレンチの層序	"
c 魚類	"	② 出土品	"
d 鳥類	"	A 自然遺物	"
B 土製品	"	a 貝類	"
a 土器	"	b 哺乳類	"
b 顔面把手	"	c 魚類	"
c 土錘	44	d 鳥類	"
C 石製品	"	B 土製品	"
a 石鏃	"	C 石製品	"
b 浮子	"	D 骨角製品	"
c 凹石	"	3. IVEトレンチの層序と出土品	"
d 方孔石	"	① IVEトレンチの層序	"
e 擬灰岩製垂飾具	"	② 出土品	"
D 骨角製品	"	4. VTレンチの層序と出土品	51
a 釣針	"	① VTレンチの層序	"
a' 釣針	"	② 出土品	52
b' 釣針	"	A 自然遺物	"
c' 釣針	45	a 貝類	"
d' 釣針	"	b 哺乳類	"
e' 錨形釣針	"	c 魚類	"
b 銛頭	"	d 鳥類	"
c 角針	"	B 土製品	"
d 骨刀	"	a 土器	"
		b 顔面把手	"

a' 顔面把手	52	5. IVトレンチの層序と出土品	56
b' 顔面把手		① IVトレンチの層序	"
(余名子館貝塚出土……参考品)	"	② 出土品	"
c 土 錘	53	A 自然遺物	"
C 石 製 品	"	a 貝 類	"
a 石 匙	"	b 哺乳類	"
b 石器破片	"	c 魚 類	"
c 石 錘(?)	"	B 土 製 品	"
d 石 錘(?)	"	C 石 製 品	"
e 石 錘	"	a 石 鏃	"
f 浮 子	"	b 石 錘	"
g 石 棒	"	c 線刻絵画のある岩版	"
D 骨角製品	54	D 骨角製品	58
a 鏃	"	a 釣 針	"
b 鏃	"	b 鹿角製尖頭工具	"
c 銚 頭	"	c 鹿角製品破片	"
d 釣 針	"	d 鯨骨製品破片	"
a' 大型釣針	"	e 鹿角先端部破片(2点)	"
b' 錨形釣針	"	V 考 察	59
c' 錨形釣針	"	1. 自然遺物について	"
e 骨 刀	"	2. 土器について	"
f 骨 刀	"	3. 貝塚の規模について	61
g 垂飾装身具	"	4. 貝塚の占める標高について	62
h 骨 斧	55	5. いわゆる土錘・石錘について	"
i 骨製篋破片	"	6. 貝輪状ユキノカサ製品について	63
j 截痕のある鹿角片	"	7. 村落の規模について	"
k 鹿角片(2点)	"	8. 対外交流について	"
E 貝 製 品	"	9. 祭祀用遺物について	64
a 貝 輪	"	付 記	"
b 貝 輪	"		

写 真 ・ 図 版 目 録

- 第 1 図 遺跡付近よりリアスブルーラインを望む
- 第 2 図 遺跡付近よりコバルトラインを望む
- 第 3 図 IV A トレンチ実測図
- 第 4 図 遺跡全景(台地上方)
- 第 5 図 鹿角製針出土状態
- 第 6 図 貝輪出土状態
- 第 7 図 IV C トレンチ実測図
- 第 8 図 IV E トレンチ実測図
- 第 9 図 V トレンチ実測図
- 第 10 図 鹿角製釣針出土状態
- 第 11 図 加工痕のある鹿角片
- 第 12 図 VI トレンチ実測図
- 第 13 図 鹿角製銛出土状態
- 第 14 図 土器出土状態
- 第 15 図 出 島 全 図
- 第 16 図 土 器 拓 影
- 第 17 図 土 器 拓 影
- 第 18 図 土 器 拓 影
- 第 19 図 土 器 拓 影
- 第 20 図 土 器 拓 影
- 第 21 図 土 器 拓 影(大木 I・大木 II A・大木 III・加曾利 B・須恵器片等を含む)
- 第 22 図 鹿 角 製 針
- 第 23 図 垂 飾 装 身 具
- 第 24 図 鹿 角 製 骨 刀
- 第 25 図 鹿 角 製 骨 刀
- 第 26 図 鹿 角 製 釣 針
- 第 27 図 鹿 角 製 釣 針 破 片
- 第 28 図 鹿 角 製 銛
- 第 29 図 鹿 角 製 鏃
- 第 30 図 鹿 角 製 尖 頭 工 具
- 第 31 図 石 匙・石 鏃 等
- 第 32 図 凝 灰 岩 製 垂 飾 具
- 第 33 図 滑 石 製 護 符
- 第 34 図 石 錘
- 第 35 図 浮 子
- 第 36 図 石 錘
- 第 37 図 貝 輪
- 第 38 図 土 錘(?)
- 第 39 図 顔 面 把 手
- 第 40 図 石 棒

出島山下貝塚第二次調査報告書

—— 宮城県牡鹿郡女川町出島字寺間山下 ——

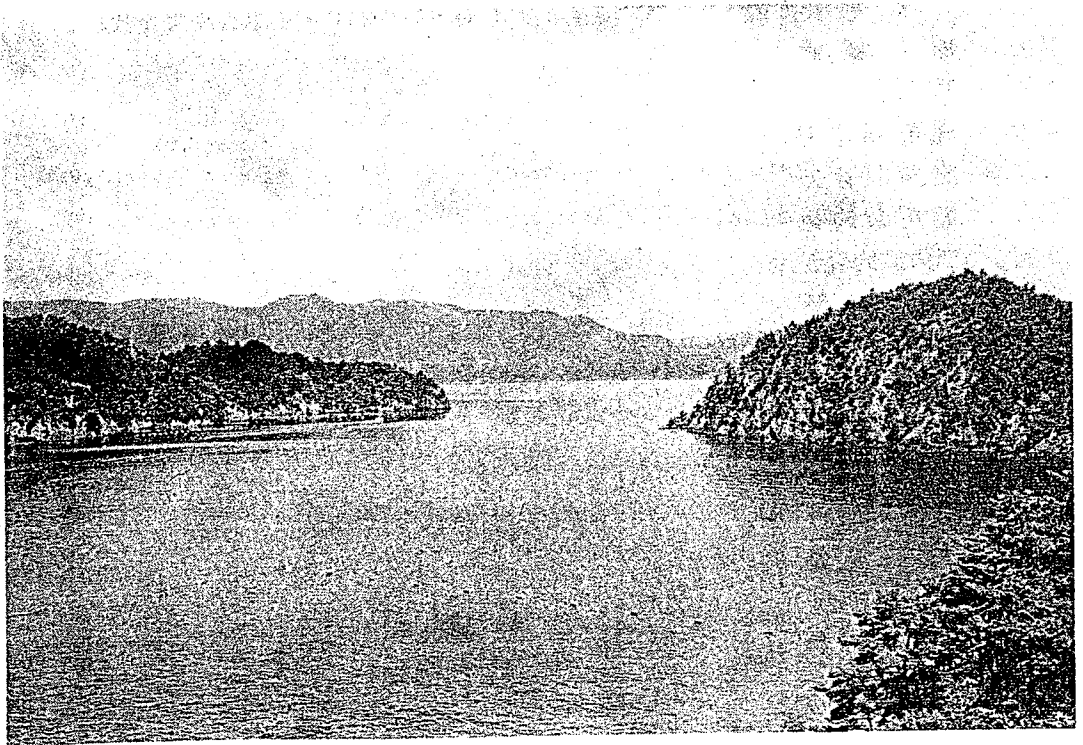
宮城県小牛田農林高等学校

教 諭 辺 見 鞆 高

I 出島の現況と遺跡の位置

出島は宮城県牡鹿郡女川町の一部に属し、女川港の北東方9.1 Kmの海上に浮ぶ小島である（北緯 $38^{\circ}27'15''$ 、東経 $141^{\circ}31'3''$ ）。本島の東側は直接太平洋に面し、そのため波浪によって浸蝕された複雑な岩石海岸となり、いわゆるリアス式海岸の様相を呈している。しかし島の西岸は女川湾と雄勝湾によって抱擁され、常に波静かで、恵まれた地形と相俟って出島・寺間等の天然の良港をつくっている。

本島は南北3.75 Km、東西1.5 Km、面積 2.07 Km^2 で南北に長い小島である。島内には河川はなく、又高峻な山もない。島全体が山地地形をなしているが、そのうちでも南部は僅かに高く87.8 mの標高を示している。本島は概ね古生紀層であり、地質は褐色粘土質土壌で、腐蝕土は少なく生産性は一般に乏しい。農耕は僅かな平坦面や傾斜面を利用して行なわれているが、自給を目標に小規模に営まれているに過ぎない。



第1図 遺跡付近よりリアスブルーラインを望む

本島には出島・寺間の両部落を合わせ約1400名のぼる島民が居住しているが、そのほとんどが漁業に従事しており、典型的な漁業集落を形成している。

本島は三陸の漁場に近い位置を占めている。従って先史時代においては一層魚族が豊かであったろうし、又背後の山地からは獣類が豊富に得られたに相違ない。従って先史時代においては本島は海の幸・山の幸に恵まれた生活の理想郷であったと思われる。

本島には島を南北に通る尾根があるが、その上を出島・寺間両部落を結ぶ県道が走っている。そのほぼ中間には女川第四小学校・同第二中学校があるが、それよりやや南寄りの地点より勾配の急な西側の斜面に沿って小径が延びている。それを辿って斜面をおりると、やがて無名の小湾に突き当たる。この付近は山下と呼ばれる小区域であるが、急崖が直ちに海に迫っているため平坦面はなく、従って島民からは見捨てられていた地域である。本貝塚は、この小湾に向って迫っている北向きの急傾斜面の比較的上方に位置している。すなわち第一次調査の際、設定された第Ⅲトレンチの上方約10mの地点に当たっている。これまでに調査を行なった本島内における各遺跡との関係位置を見るならば配石遺構群は本貝塚のほぼ頭上にあるといってよく、又縄文前・中期の遺物を出す余名子館貝塚は本貝塚の反対斜面、すなわち南側にあることになり、この地域が今のところ本島内における遺跡の集合地点といってよい。

Ⅱ 本貝塚発見の動機

寺間において水産加工業を営む阿部八治郎氏は、この地に水産加工所を設立するため1969（昭和44）年、海岸付近の一部を掘り崩して、地ならしを行ない敷地の造成に着手したが、その際、海岸付近の随所から縄文土器片、貝殻等が発見され俄かに人々の注目を集めることとなった。



第2図 遺跡付近よりコバルトラインを望む

その後の踏査により、小湾に向って迫っている北向きの急傾斜面の下方に貝塚のあることが確認されるに至ったので1970(昭和45)年7月、この地にⅠ・Ⅰ'・Ⅲトレンチを設定して第一次調査を行なった。貝殻の分布範囲は、この地点に限定されるものと思われたが1971(昭和46)年4月以降における数度にわたる踏査により、これより遙か上方の急傾斜面にも、より広い範囲にわたって、厚い貝殻の堆積のあることが確認されるに至った。1971年7月ⅣA・ⅣB・ⅣC・ⅣD・ⅣE・ⅣF・Ⅴ・Ⅵのトレンチを設定して第二次調査に着手することとなった。

Ⅲ 調査の経過

宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班員15名は7月23日渡島、寺間到着後、小型船に乗り換えて遺跡に最も近い無名の小湾に辿り着いた。測量器材、発掘器材等の整備点検の後、直ちに作業に着手することとなった。前述の通り本貝塚は45°~50°の勾配を示す急傾斜面にあるが、その標高は約20mに達している。斜面全体が雑木雑草に取り囲まれ、恰も熱帯林を思わせるような様相を呈しているため調査はおろか遺跡に近づくことさえ至難のわざであった。先ず大鉤をふるって、これらの障害物を除去し、登はんのためのルートを切り開いた。更に発掘予定地を中心に広く刈り払い、ここに3トレンチを設定した。すなわち第一次発掘時において設定したⅢトレンチの上方に巾1.5m、長さ9mのⅣトレンチを設定して、これを更にA・B・C・D・E・Fの6区に区分した。これらのうちA・C・D・E・F各区に、それぞれ2名ずつを配置して発掘に当らせることとなったがA区の堆積は最も厚く釣針・貝輪・鈎・篋状骨角器等が自然遺物と共に発見されるに至った。この区域は断面図によっても知られるように凹地になっているため充分な堆積を見たものと考えられる。この区域に比すれば他の3区は50°を越す急斜面であるため遺物は殆ど滞留することなく崩落してしまったものと思われる。各区とも、それぞれ僅かに10cm程度の薄い堆積層しか見られなかった。

7月24日には更に3名の班員が加わり、18名のメンバーを以て諸作業に取りかかった。この日はⅣトレンチA区の上方に巾1.5m・長さ4mのⅤトレンチを東西の方向に設定した。更にその東方には巾1.5m・長さ2mのⅥトレンチをも設定した。これはⅣトレンチA区の層の状態から当然この区域にも厚い堆積層があると推定されたからである。Ⅴトレンチのほぼ中央部にはシウリの純貝層が見られ、その両側にはシウリを主とし、カキ・アサリ少量のハマグリ等の混った貝層が堆積していた。このトレンチにおける土器片の埋蔵量は可成り豊富であった。

Ⅵトレンチは貝塚の末端部に相当するらしく、Ⅴトレンチに比すれば遺物の埋蔵量も少量に過ぎなかった。この頃ⅣトレンチはA区を除き殆ど発掘が終了していたので断面図の作製に取りかからせることとした。7月25日には学校における実習に参加するため2名が帰校し16名を以て作業に着手した。ⅣトレンチA区並にⅤトレンチは貝層に差しかかり種々の遺物が発見されて来た。土器片、シカ・イノシシ等の獣骨片、マグロ等の魚骨片、水鳥類のものと思われる鳥骨片等が多量に採取されたが、これらに混ってシャチの歯牙を加工した垂飾具が発見されたのは貴重であった。しかしⅤトレンチの一部(東端)は、すでにこの日夕刻地山に達していた。

7月26日は朝から降雨に見舞われた。午前中は発掘に関する打合わせ並に出土品の洗浄を以て終始した。午后も生憎の天候ではあったが時々晴間があった。その都度、遺跡にかけ登っては発掘という状態であったが土器片をはじめ石器・骨角器類の出土が相次いだ。殊にⅣトレンチA区における素晴らしいビンの発見は忘れ難い。午後5時作業終了。本日の作業員8名。

7月27日、快晴、実習終了の生徒2名加わり発掘人員は10名となる。これらのうち3名に測量を担当させ、7名を以て貝層の追究に当らせた。

3トレンチとも貝類は、ほぼ同様でカキ・アワビ・シウリ等が中心をなしていた。ところどころに拳大又はそれ以上の大きさの石塊が入り込んでいた。この頃より出土品には注目すべきものが現われて来た。すなわちⅣトレンチA区より貝輪・凝灰岩製垂飾具・銚・骨刀・浮子、Ⅴトレンチより鹿角製銚、Ⅵトレンチより錨形釣針等の出土を見た。この日、Ⅵトレンチの西端の一部並にⅣトレンチA区の南端が地山に到達した。

7月28日、快晴、実習を終了した生徒が加わり、本日の作業員は12名となる。

3トレンチとも、それぞれ発掘を進めたがⅥトレンチは正午頃地山に到達して発掘を終了した。3名が断面図の作製に当り午後2時頃終了した。他のトレンチにおいても、すでに貝層の追究は終り、混貝土層に差し加かっていた。土器片・魚獣骨片は多量に発見されたが、これらと共にⅤトレンチより骨刀、Ⅴ・ⅣAトレンチより錨形釣針各々1点、更に凹石もⅣA・Ⅴトレンチより各々1点出土して発掘者の注目を集めた。このほか方孔石は各トレンチにおいて発見された。

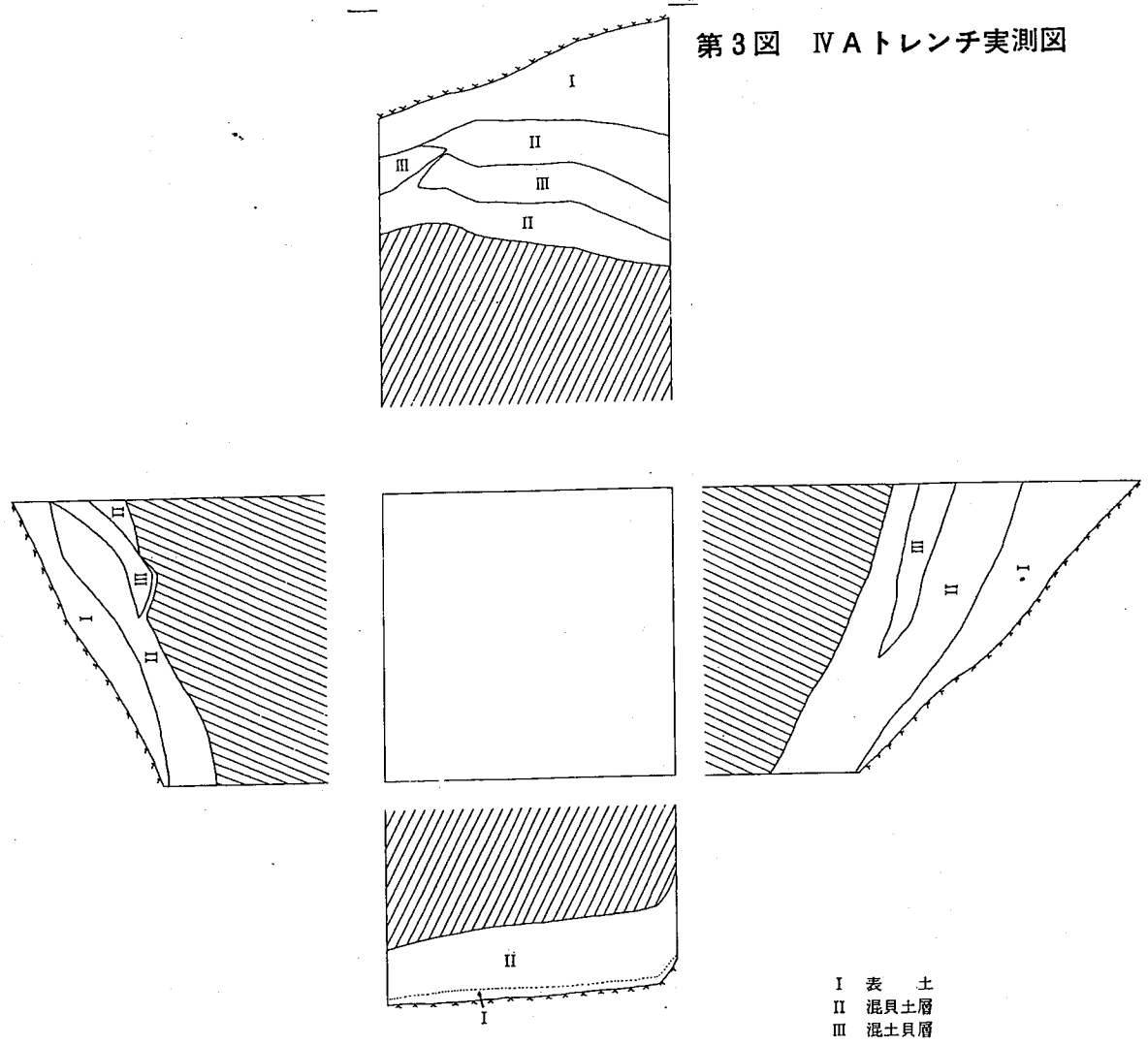
7月29日、晴、12名参加、ⅣトレンチA区の発掘は、すでにその大半を終了し僅かに残る北西隅の混貝土層の追究に全力を集中していたが、正午頃ようやく地山に到達するに至った。午后は断面図を作製して本トレンチ調査の一切を終了した。

一方Ⅴトレンチの発掘は、そのまま続けられた。本トレンチの中央部よりやや東寄りの混貝土層中より石棒、西寄りの同層より浮子（軽石製）各1点が発見された。この層の堆積は厚く午後3時頃まで発掘が続けられたが出土品は土器小片・破碎された貝殻小片のみで特に注目すべき遺物は発見されなかった。

本トレンチの西端部は深く落ちこんでおり、特に厚い堆積を示しているようであった。この部分の発掘は夕刻に至って、ようやく終了したが、やはり土器小片・貝殻小片を含む混貝土層で特に見るべき遺物の発見はなかった。本トレンチの断面図作製は明朝行なうこととし、午後6時、第7日目の発掘作業を終了した。

7月30日、晴、参加人員12名、午前6時よりⅤトレンチの断面図作製に取りかかる。正午終了。

第3図 IVAトレンチ実測図



I 表 土
II 混貝土層
III 混土貝層

0 50 100cm
LEVEL 2269.6cm
昭和46年 7 月29日

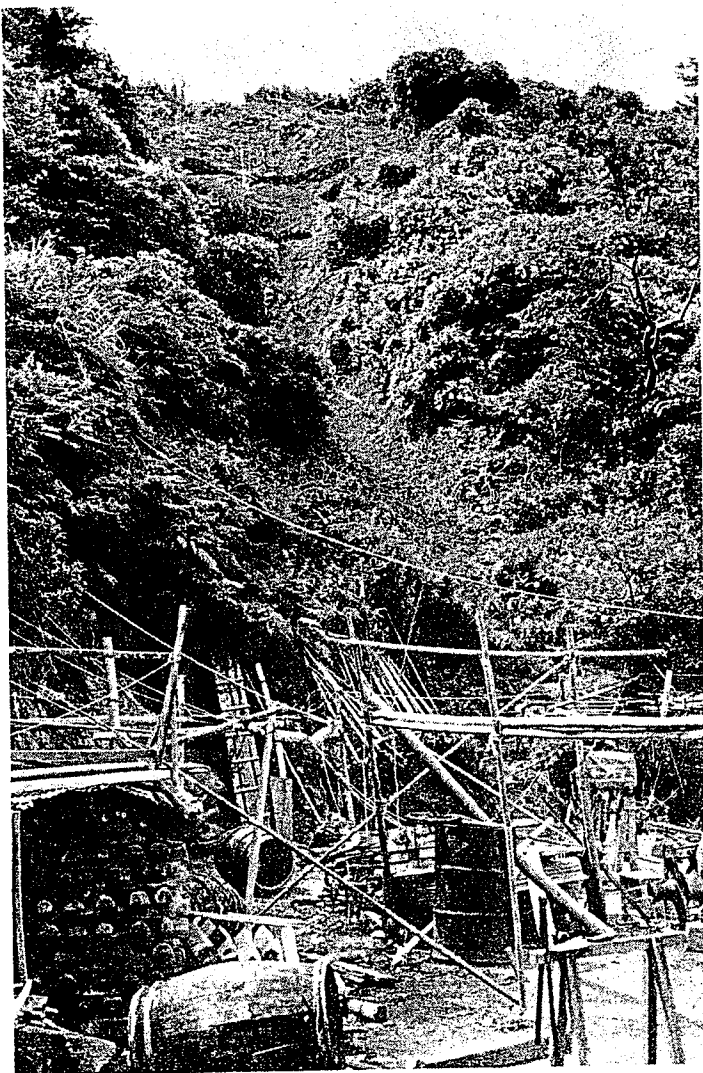
Ⅳ 各トレンチの層序と出土品

1. ⅣAトレンチの層序と出土品

① ⅣAトレンチの層序

ⅣAトレンチは台地北側急斜面の上方にある。すなわち標高は約19m、勾配は約50°でVトレンチの直下に位置している。トレンチは東西1.5m、南北1.5mである。

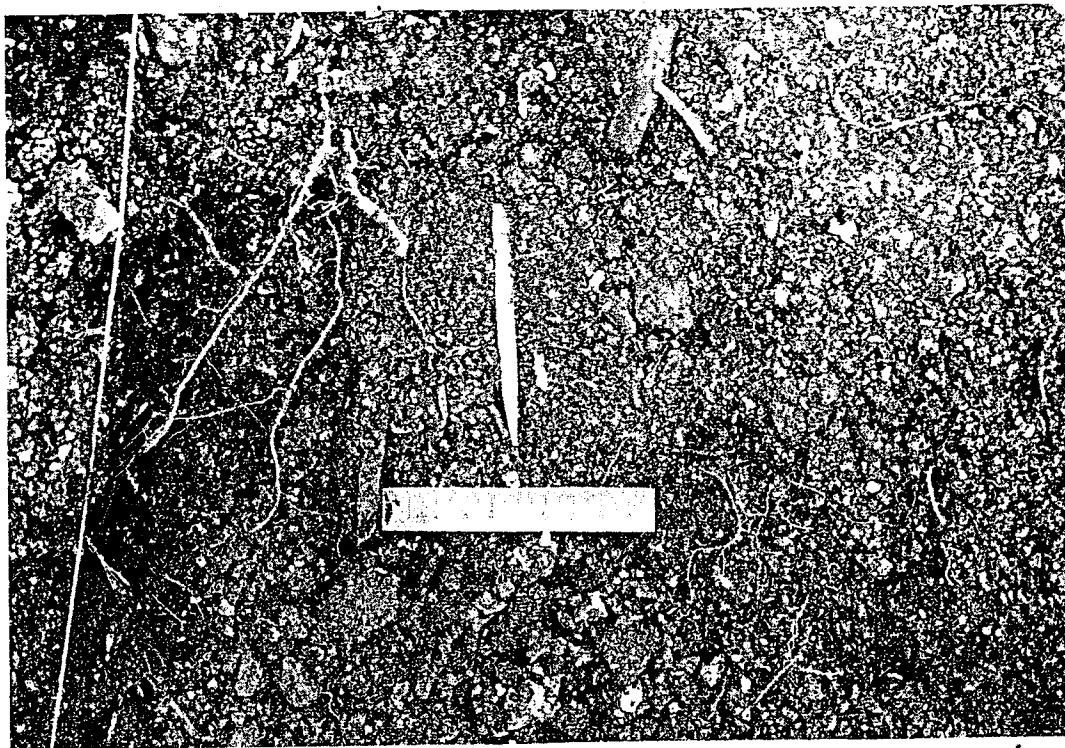
本トレンチは3層に区分される。表土は半島状台地上に畑開墾の際生じた土砂が投棄され、そのまま堆積したものと思われるが東半部が薄く、西半部が厚い。表土は茶褐色で少量の土器小片と大小の石塊が含まれていた。混土貝層の上部に位置する混貝土層は約20cm～30cmの厚さを示しており暗褐色を呈している。この層に含まれる貝類はカキ・レイシ・アワビ・ユキノカサ・クボガイ等で何れも破碎されて細片状となって混入している。鳥骨類は或る程度まとまって発見されたが、魚骨・獣骨類の混入は少量に過ぎなかった。この層からは土器・石器・骨角器等豊富な出土品が発見された。混土貝層に含まれている貝類はカキ・アワビ・アサリ・レイシ・ユキノカサ等で種類は前者とほぼ同様であるが、カキが圧倒的に多く他は付随的に含



第4図 遺跡全景（台地上方）

入していたに過ぎない。魚骨・獣骨・鳥骨類は、まばらに少量発見された程度である。この層からは土器片は或る程度まとまって発見されたが、その他の遺物の含入は少量に過ぎなかった。混土貝層下の混貝土層は暗褐色を呈し、カキ・レイシ・アワビ等が含まれ魚骨・獣骨・鳥骨類もまばらに発見された。この層からは土器・石器・骨角器等が多量に発見された。尚南壁においては上述の如く混貝土層は混土貝層によって上・下2部に区分されていたが、

東・西・北壁においては表土下に混貝土層 1 層のみが見られたに過ぎない。



第5図 鹿角製針出土状態

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ・アワビ・シウリ・レイシ・クボガイ・ユキノカサ・ミガキボラ・イガイ・ツメタガイ・オオガイ・アサリ・ハマグリ・ヒオウギ等であるが、これらのうちカキ・アワビが圧倒的に多い。

b 哺乳類

イノシシ シカ キツネ

c 魚類

マグロ カツオ スズキ

d 鳥類

カモ ガン

B 土製品

a 土器（考察の項参照）

b 顔面把手（第39図-1）

縄文後期の土器に付属した顔面把手で、顔面は菱形を呈し径5mm～6mm位の棒状工具を突刺して両

眼、口等を表現している。左眼が多少変形しているが、これは埼玉県狭山市村山第三小学校敷地出土、東京都西多摩郡秋多町二の宮 二の宮神社境内出土、神奈川県横浜市金沢区青ヶ台貝塚出土の3例の如く果して片目が傷ついていることを表出したものか、それとも単なる製作上のミスによるものか判然としない。

c 土 錘

三角形又は盾形 4点

円 形 6点

変 形 18点

(考察の項参照)

C 石 製品

a 石 鋏 (第31図)

三角形を呈し、中高で基部が湾入している。チャート質石材を使用し、打製である。長さ2.2 cm。

b 浮 子 (第35図)

7 cm × 4 cm × 4.5 cm と 7 cm × 3.5 cm × 4 cm の2点発見された。いずれも軽石の先端部に径6 mm ~ 7 mm の紐通し用の孔を穿っている。

c 凹 石

11 cm × 8.5 cm × 2 cm と 12 cm × 7.5 cm × 3 cm の2点発見された。前者は表面に1個所、裏面に2個所凹を有している。後者は表面に1個所のみ凹を有し全体に火をかぶった跡が認められる。

d 方 孔 石

径4 cm位の自然石のほぼ中央部に長方形の穿孔を有するものである。同類のものは各トレンチより2~3点ずつ発見されている。(考察の項参照)

e 凝灰岩製垂飾具 (第32図)

全長4 cm、厚さ8 mmの凝灰岩製垂飾具である。ほぼ三角形に近い本体の先端部に長さ1.2 cm 径7 mmの棒状の突起2本をV字状すなわち先ひろがり状に付している。そのうち1本は欠損しているが、その断面に径3 mmの穿孔のあとがある。一方の突起の表面には径3 mmの円形の凹点1個が認められる。表裏面には鋭い石器を以て刻み込まれた深い刻線が数条、任意の方向に走っている。後期から晩期へかけての流行品である。

D 骨 角 製品

a 釣 針 (第26図・第27図)

a' 釣 針

長さ7.2 cm・巾1 cm・厚さ7 mmの鹿角製釣針である。上部には糸結着用の深い截痕がある。針の部分は欠損している。つくりは、やや粗雑で曲りは鈍角の部類に属する。

㍑ 釣 針

長さ約5 cmの鹿角製釣針である。針の一部が欠損しているので逆刺を伴うものかどうか不明である。曲りは鈍角の部類に属する。

c' 釣 針

長さ約5 cmの鹿角製釣針である。針の部分が欠損しているので逆刺を伴うものかどうか前者同様不明である。曲りは鈍角の部類に属する。

d' 釣 針

僅か4 cmの破片に過ぎないので詳細は不明であるが、おそらく前者と同様であろう。鹿角製である。

e' 錨形釣針

長さ約4.2 cmの鹿角製錨形釣針であるが一方の針が欠損している。先端部には径3 mmの孔が穿たれている。尙最先端部には浅い条痕が一条認められるが、これは孔を通して糸を結着した際、糸のズレを防いで安定させるための配慮であろう。

b 銛 頭(第28図)

鹿角を加工したもので、両面とも研磨している。長さは4.4 cm、厚さ5 mmで中央部に径4 mmの孔が穿たれている。離れ銛の銛頭であろう。

c 角 針(第22図)

長さ12.3 cm、巾9 mm、厚さ4 mmの鹿角製針である。先端は鋭利に加工され、基部には径3 mmの穿孔がある。全体が入念に研磨されている。

d 骨 刀(第25図)

現在における長さは23.8 cm、巾3 cm、厚さ1.2 cmの鯨骨製骨刀である。全体が入念に研磨され、基部に比し先端部は、やや扁平である。基部の装飾部と思われる部分が欠損し僅かにその痕跡をとどめている。実用品ではなく一種の宗教用具と見られる。

e 角製尖頭工具(第30図)

現在における長さ7.3 cm、巾1.3 cmの鹿角製品破片である。先端は丸味を帯び鋭利ではない。又先端より約4 cmのところに2条の深い条痕が認められるが使用の際、偶然生じたものであろう。その他随所に使用痕が認められる。

f 篋状骨角器(第30図)

現在における長さは約7.9 cm、巾約1 cmの鹿角製篋の破片と推定される。鹿角を縦割りにして先端を扁平に加工したもので表裏面とも研磨され、使用痕も認められる。先端部、基部とも欠損している。

g 骨製ペン先状刺突具

マグロの脊椎骨を加工したもので、ペン先状を呈している。しかし先端は特に鋭利ではない。長さ2.1 cm、用途は不明である。

h 鹿角製品破片

長さ3.8 cm、径1.8 cmの円筒形に近い鹿角製品破片である。中央部には径7 mmの孔を穿ったあとが認められ、全体が焼けている。原形は不明である。

i 加工痕の認められる鹿角片

長さ4.6cm、巾4.5cm、厚さ2.3cmの不整形鹿角片で全体を研磨している。先端の突起部には恰も糸を結着するために付したような截痕が認められる。用途は不明である。

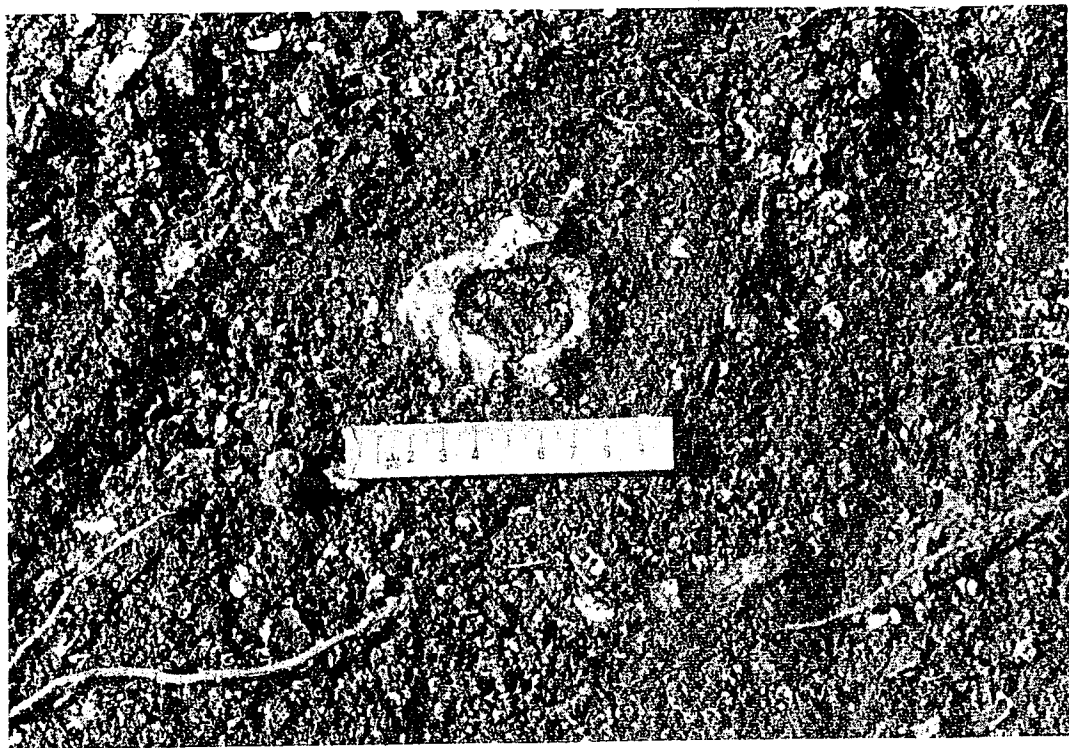
Ⅲ 貝 製 品

a 貝 輪 (第37図)

カキ殻を加工したものである。内径3.7cm、外径6.8cmで全面を研磨している。

b 貝 輪 (第37図)

ハイガイを加工したもので全面を研磨し美麗に仕上げている。破片であるため詳細は不明である。



第6図 貝 輪 出 土 状 態

2. IV C トレンチの層序と出土品

① IV C トレンチの層序

本トレンチはIV A トレンチの北方約1.5 mの急傾斜面に位置している(勾配約60°)。トレンチ1.5 m×1.5 m、急傾斜面であるため僅かに25 cm程度の暗褐色の表土があるだけで層位の区分は全く認められなかった。表土にはカキ・アワビ等の貝殻細片、イノシシ・シカ等の獣骨片、魚骨小片及び土器小片数10点と骨角器1点のみが埋蔵されていたに過ぎない。

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ アワビ レイシ

b 哺乳類

イノシシ シカ クマ

c 魚類

マグロ カツオ タイ

d 鳥類

なし

B 土製品

土器(考察の項参照)

C 石製品

なし

D 骨角製品

ヤス(第30図)

長さ8.3 cm、巾9 mmの鹿角製ヤスである。先端は磨耗し、基部は欠損している。

3. IV B トレンチの層序と出土品

① IV B トレンチの層序

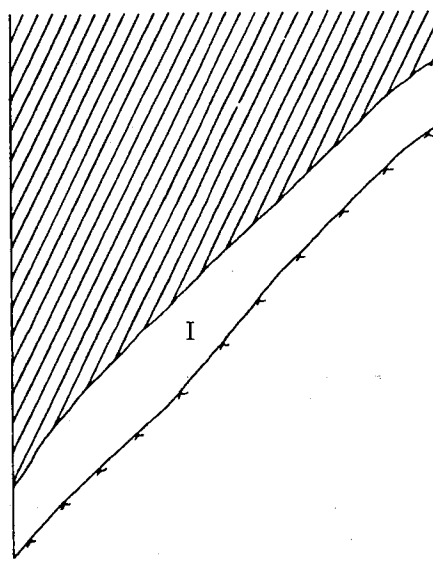
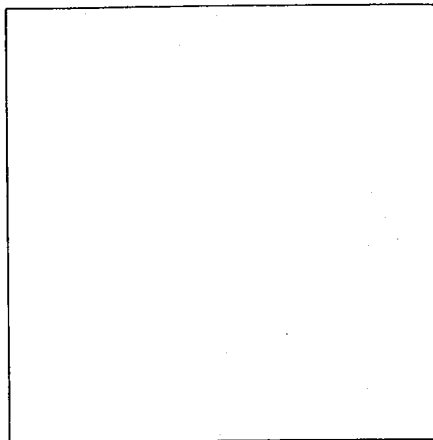
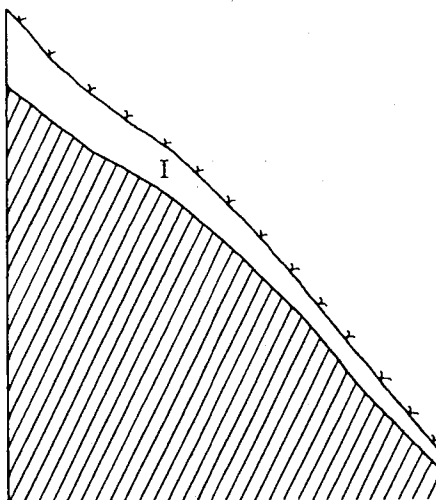
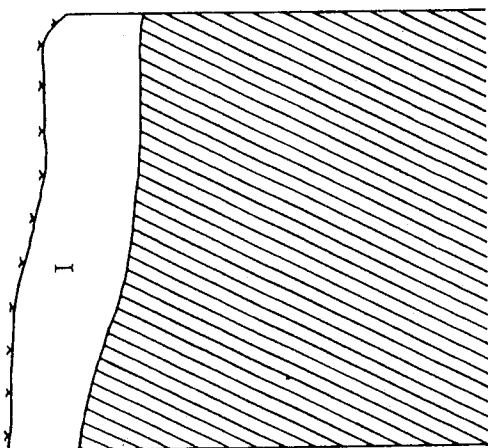
本トレンチはIV C トレンチの北方約1.5 mの急傾斜面上に位置している(勾配約60°)。トレンチ1.5 m×1.5 m。IV C トレンチ同様、急傾斜面であるため堆積は薄く、僅かに2層認められたに過ぎない。第1層は暗褐色の混貝土層で、その平均の厚さは5 cm~10 cm程度である。この層には貝殻、獣骨、魚骨、鳥骨等が、いずれも細片となって混入していた。第2層は暗褐色を呈し貝殻細片が少量混入しているだけで、その他の自然遺物は発見されなかった。人工遺物としては土器小片少量が採取されたに過ぎない。

② 出土品

自然遺物、土器に関しては前記IV C トレンチの場合と、ほぼ同様と認められるので記載を省略する。いわゆる土錘は盾形の部類に属するもの1点、変形5点出土している。

尚IV トレンチ中、B・D区域は堆積も薄く、すべて他区域と同様と認められるので発掘調査を省略することとした。

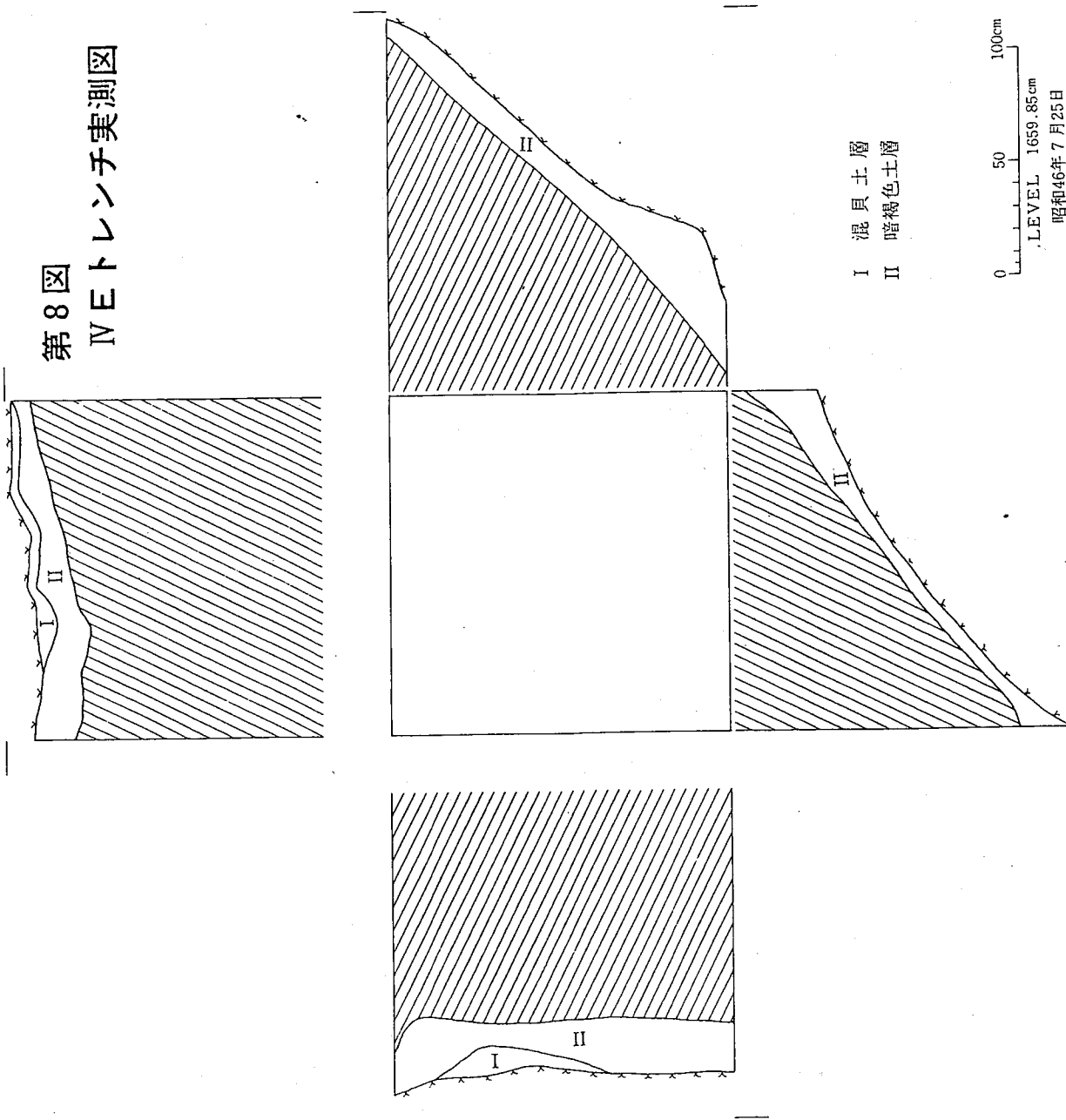
第7図
IVCトレンチ実測図



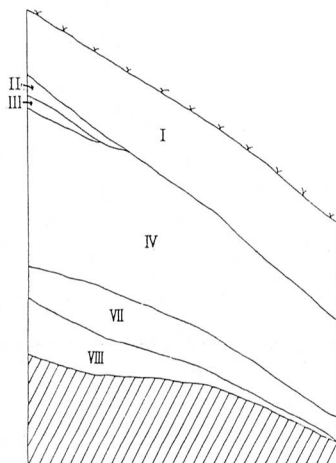
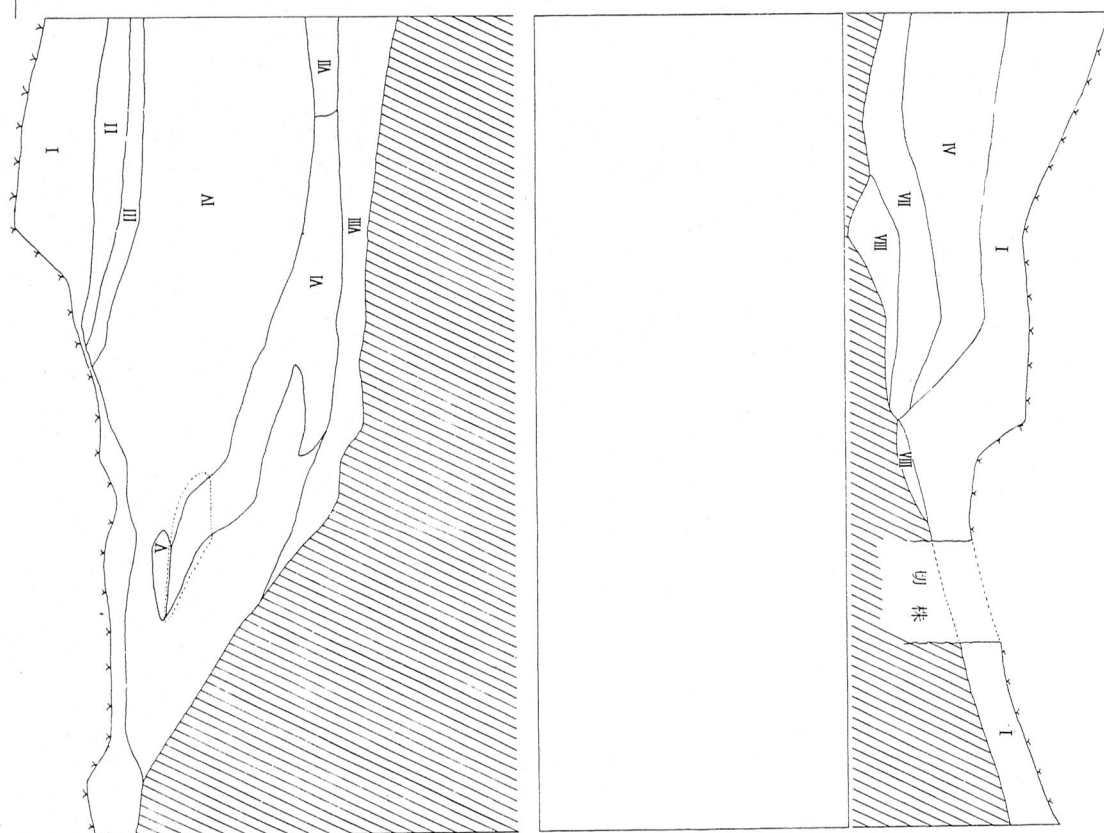
I 表 土

0 50 100 cm
LEVEL 1992.1cm
昭和46年7月25日

第8図
IV E トレンチ実測図



第9図 V.トレンチ実測図



- I 表土
 II 第1混貝土層(多くの貝殻は粉状を呈する)
 III 第1混土貝層(シウリ, レイシ)
 IV 第2混貝土層(炭化物を多く含む)
 V 第2混土貝層(シウリ)
 VI 純貝層
 VII 第3混土貝層
 VIII 第3混貝土層
 ○ の中付近は焼けたシウリの密集域

0 50 100cm
 LEVEL 2453.3cm
 昭和46年7月30日

4. Vトレンチの層序と出土品

① Vトレンチの層序

VトレンチはIV Aトレンチの南方1.5 mの傾斜面上にある。トレンチ 東西4 m、南北1.5 m。本トレンチは今回調査のトレンチ中、堆積は最も厚く、8層に区分される。表土は、やはり半島状台地上の畑地開墾の際生じた土砂が投棄され、そのまま堆積したものと思われる。全体が褐色を呈し西部が厚く東部が薄い。表土中には大小の石塊が混入し自然遺物・人工遺物の埋蔵は殆ど見られなかった。表土下に見られる第1混貝土層は暗褐色を呈し、その平均の厚さは10 cm程度である。この層には各種の自然遺物が堆積していたが、すべて破砕されて細片状になっていた。人工遺物は殆ど発見されなかった。その下に位置する第1混土貝層は暗褐色を呈し、その平均の厚さは約10 cmである。貝類はシウリ・レイシが大部分で、その他の貝類は、すべて破砕されて細片状になっていた。その他の自然遺物は少量含まれているだけで特に目立なかった。人工遺物も土器小片少量が発見されただけである。第2混土貝層は第2混貝土層と純貝層との間に挟まれた小堆積と見られる。厚さは10 cm位で純粋なシウリの層である。魚・獣骨等は殆ど混入していなかった。特に注目すべき人工遺物の出土も見られなかった。第2混貝土層は第1混土貝層と純貝層及び第3混土貝層の間にある。その平均の厚さは約60 cmであるが貝の種類、土の色等には殆ど変化がなく、それらによって層を更に細分することは不可能であった。自然遺物は貝類・哺乳類・魚類・鳥类等殆どすべての種類が多量に堆積していた。又ところどころに大小の不整形石塊が見られた。人工遺物は、この層の下半部に集中しており大量の土器片・



第10図 鹿角製釣針出土状態

骨角器類が発見された。特にシャチの歯牙を加工した垂飾装身具は注目すべきものである。その他貝輪2点も出土したが石器の出土は2点に過ぎなかった。純貝層は第2・第3混貝土層の間に挟まれている。層の平均の厚さは20cm～30cmで各種の貝類が密に堆積していた。特にトレンチの東隅には焼けたシウリの純粹な堆積が見られた。魚骨・獣骨・鳥骨等は細片状となって混入していた。しかし人工遺物の埋蔵は少く、少量の土器片の出土を見たに過ぎなかった。第3混土貝層は第2・第3混貝土層の間に堆積しており、その北西部において前述の純貝層と接している。この層には暗褐色土が少量混入しており、その平均の厚さは15cm～20cm位である。自然遺物の堆積状況は前述の純貝層とほぼ同様である。人工遺物は土器片及び骨角器1点が出土したのみである。この層にも大小の石塊が混入していた。第3混貝土層は地山に接する部分にある。暗褐色を呈しているが、ところどころに黄色土を挟んでいる。この層は北壁近くで殆ど消滅している。貝類は細片状となって混入しており、量も減少して来る。魚骨・獣骨・鳥骨等の含入も乏しくなっている。人工遺物としては土器片及び骨角器1点の出土を見たのみである。本トレンチは堆積が厚く最後まで発掘作業を継続した区域である。

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ・アワビ・シウリ・レイシ・クボガイ・ユキノカサ・ミガキボラ・イガイ・ツメタガイ・オオガイ・アサリ・ハマグリ等であるが、これらのうちカキ・アワビ・シウリが圧倒的に多い。

b 哺乳類

イノシシ シカ シャチ クジラ

c 魚類

マグロ カツオ サメ タイ

d 鳥類

カモ ガン

B 土製品

a 土器(考察の項参照)

b 顔面把手

a' 顔面把手

縄文後期の土器に付属した顔面把手で両眼の部分には径1.8cmの平らな薄い円形粘土を貼り付け、その中央部に径7mm位の棒状工具を突き刺して両眼を表現している。両眼の間には径1cm位の丸棒を突き刺して貫孔をつくっているが、これは口を表出しているものと思われる。尙この顔面把手はⅣAトレンチ出土のもの及び余名子館貝塚出土のものに比すれば、より抽象化されている。

b' 顔面把手(余名子館貝塚出土……………参考品)(第39図-2)

縄文中期の土器に付属する顔面把手で、先ず径5 mm位の細棒を以て横に沈線による長方形を描き顔の輪郭を示している。長方形のほぼ中央部には同じ丸い細棒を突き刺して縦に2個の丸い凹点を付しているが、これは鼻を表現したものであろう。その両側には径1.1 cm位の丸棒によって貫孔をつくっているが、これは両眼であらう。口は前述の径5 mmの細棒によって、それらしく表出されている。尙頭部の両側面には細棒による斜めの沈線が描かれているが、これは頭髪を表わすものであろうか。

c	土	錘		
	円	形	9	点
	盾	形	1	点
	四角	形	5	点
	変	形	21	点

(考察の項参照)

c 石 製 品

a 石 匙 (第31図)

長さ8.2 cmの横形石匙である。チャート質石材を用い、片面を加工している。両端に長さ1 cm・巾7 mmのつまみを付している。

d 石 器 破 片 (第31図)

現在における長さは3 cm・巾2.2 cm・厚さ6 mmのスレート製石器の破片である。表裏面とも研磨され先端には刃が付けられている。小破片のため原形の推量は困難である。(縄文後期の石斧破片とする説もある。)

c 石 錘 (?) (第36図)

径3 cm位の棒状砂岩を縦割りにして、先端に刻み目を入れたものである。石錘であらうか。

d 石 錘 (?) (第36図)

現在における長さ6.4 cm、最大径3 cmの棒状砂岩で、断面は楕円状を呈し、先端には刻み目を入れたものである。石錘であらうか。

e 石 錘 (第34図)

長径6.5 cm、短径4.5 cm、厚さ1 cmの自然石の両端に巾9 mmの刻み目を入れ、糸かけをついている。中央より、やや片寄ったところに径約1.3 cmの孔があるが、これは自然発生的なものであろう。孔を有する石を、そのまま石錘として使用している例は本貝塚においては、しばしば見られるが、これは更に糸かけを付して使用した例である。石錘に糸かけを付するのは後期の特徴とされている。

f 浮 子 (第35図)

長径9.6 cm、短径7.5 cm、厚さ4.8 cmの楕円状を呈する軽石の先端部に径1.3 cmの紐通し用の孔を穿ったものである。浮子であらう。

g 石 棒 (第40図)

現在における長さ11.2 cm、径3.6 cm位で先端がくびれている。全体が研磨され、片面を欠損している。基部末端にも折損の跡がうかがえる。

D 骨 角 製 品

a 鏃 (第29図)

全長5.1 cm、柄部2.2 cmで全面を研磨し、先端を鋭利に加工している。鹿角製である。

b 鏃 (第29図)

長さ5.9 cm、径5 mm位の鹿角製鏃である。先端を鋭利に加工し基部には径4 mm位の膨らみを付けている。

c 銚 頭 (第28図)

長さ7.2 cmの鹿角製銚頭の銚頭である。径4 mm位の凹点が認められるが、これは穿孔を中止したため生じたものであろう。

d 釣 針 (第26図・第27図)

a' 大 型 釣 針

長さ8.2 cmの鹿角製釣針である。針の部分は欠損している。この釣針の表裏面には縦に深い溝を掘り込んでいるが特に片面の溝の深さは約5 mmに達する。これは鹿角を縦割りしようとして途中でやめたのであろう。つくりは全般に粗雑である。

b' 錨 形 釣 針

長さ2.9 cmの鹿角製錨形釣針である。糸通し用の孔が破損し、後改めて糸結着用の突起を付して再使用したものと認められる。全体が研磨され堅牢である。

c' 錨 形 釣 針

長さ3.6 cmの鹿角製錨形釣針である。先端には径3 mmの孔を穿っている。一方の針の先端が欠損している。これらの錨形形式は堀の内期の特徴とされている。

e 骨 刀 (第24図)

全長21.9 cmの鯨骨製骨刀である。柄に相当する部分の先端には半円形の扁平な膨らみをつけ、その部分に径4 mm位の孔を2箇所並べて穿っている。この孔には糸擦れのあとは認められない。柄に相当する部分(長さ約9.5 cm位)の断面は巾約1.6 cm位で楕円状に加工され、刃に相当する部分の断面は巾2.2 cmで扁平な楕円状を呈している。两部分の間には段がついていて区分を明瞭にしている。全体が研磨され美麗である。先端の両側面が僅かに欠損している。実用品ではなく一種の宗教用具と見られる。

f 骨 刀

現在における長さ9.7 cm、巾1.7 cmの扁平な鯨骨製刀の破片である。基部は丸く加工され、その中央部に径9 mmの突孔がある。破片であるため詳細は不明である。

g 垂 飾 装 身 具 (第23図)

長さ7.2 cm、最大径2 cm位の勾玉状を呈するシャチ(鯨)の歯牙を加工した垂飾具である。先端に径6 mmの糸通し用の孔を穿っているが孔の部分には糸擦れのあとが認められる。勾玉の原形をなすものであろう。

h 骨 斧

長さ20cmの鯨骨を縦割りにして加工したものである。すなわち基部は9cm位の長さにならって棒状(径4cm位)に加工され握り易くしている。先端は左右から削り取られ先尖り状を呈している。重量もあり、つくりも頑丈で荒仕事用の工具として好適である。土掘り用具として或いは木をこわしたり、くり抜いたりする場合に使用されたものであろう。現在は先端が磨耗し鋭利さを欠いているから廃品として投棄されたものであろう。

i 骨製篋破片(第30図)

現在における長さ3.9cm、巾0.9cm位の骨製篋の先端部破片である。全体を研磨しているが一方の側面には使用痕が認められる。

j 截痕のある鹿角片(第11図)

鹿角を根元から切り取り、その断面中央部に深い刻み目を入れている。そのほか随所に刻み目や焼痕を残している。鹿角を縦に打ち割ろうとして途中でやめたのであろう。

k 鹿角片(2点)

2点とも磨耗痕の認められる鹿角先端部破片であるが果して使用痕か疑わしい。

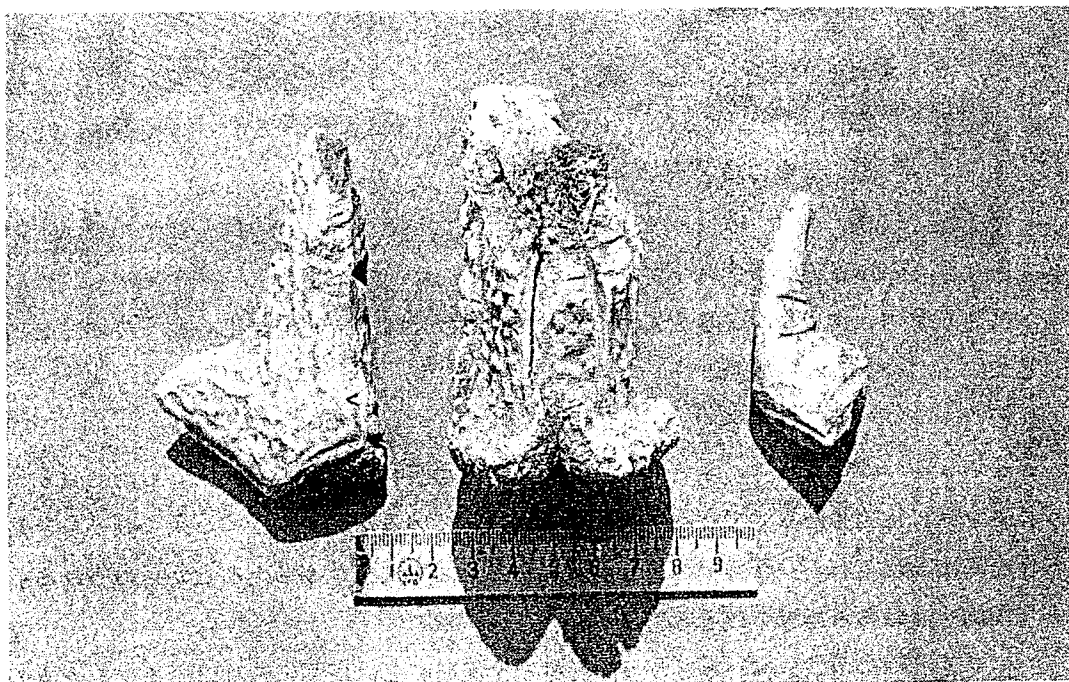
Ⅱ 貝製品

a 貝輪(第37図)

内径4.2cm位のカキ殻製貝輪である。全面が研磨されているが、つくりはやや粗雑である。

b 貝輪(第37図)

カキ殻製の貝輪であるが前者に比し大形である。破片であるため詳細は不明であるが内径は6cm位と推定される。つくりはやや粗雑である。



第11図 加工痕のある鹿角片

5. VI トレンチの層序と出土品

① VI トレンチの層序

本トレンチは貝塚の東端を把握するためVトレンチの東方50cmの急傾斜面上に設定した。東西2m、南北1.5mで堆積層の層の厚さは、ところによって著しい差がある。本トレンチは3層に区分される。

表土はやはり半島状台地上に畑開墾の際生じた土砂が落下し堆積したものと考えられる。褐色を呈し東側は厚く、西するに従って厚さを減じて行く。表土には少量の土器片が塊石類と共に混入している。尚本トレンチは貝層の末端部に相当するらしく、その中心部は本トレンチの東方に延びているものと推定される。

表土下には巾約10cmの黒褐色土を含むシウリとレイシガイを中心とする混土貝層が見られる。人工遺物は殆どなく貝類以外の自然遺物の埋蔵も見られなかった。この層の下には混貝土層が続いているが東部、南部に厚く西・北へ向うに従って、やがて消滅する。主な貝類はシウリ・カキ・レイシ・ユキノカサ等で魚・獣骨類は稀に発見される程度である。人工遺物としては土器類及び若干の石器、骨角器類が発見されたにとどまる。

② 出 土 品

A 自 然 遺 物

a 貝 類

シウリ カキ レイシ ユキノカサ クボガイ アワビ

b 哺 乳 類

イノシシ シカ

c 魚 類

マグロ スズキ

B 土 製 品

土 器 (考察の項参照)

C 石 製 品

a 石 鏃 (第31図)

長さ3.7cm、巾2.4cm、厚さ7mmの石鏃である。ほぼ三角形を呈し、扁平で周囲を加工している。サヌカイト製。

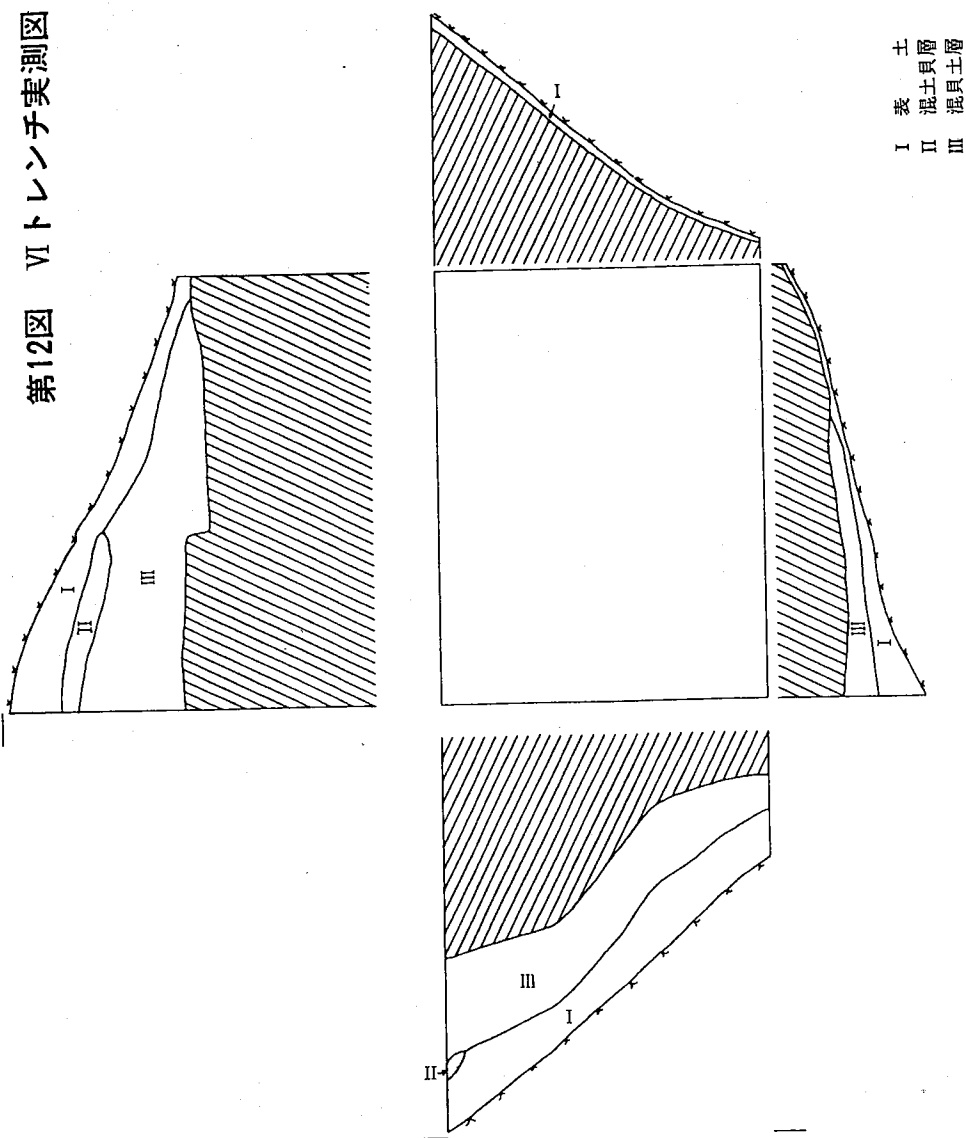
b 石 錘 (第36図)

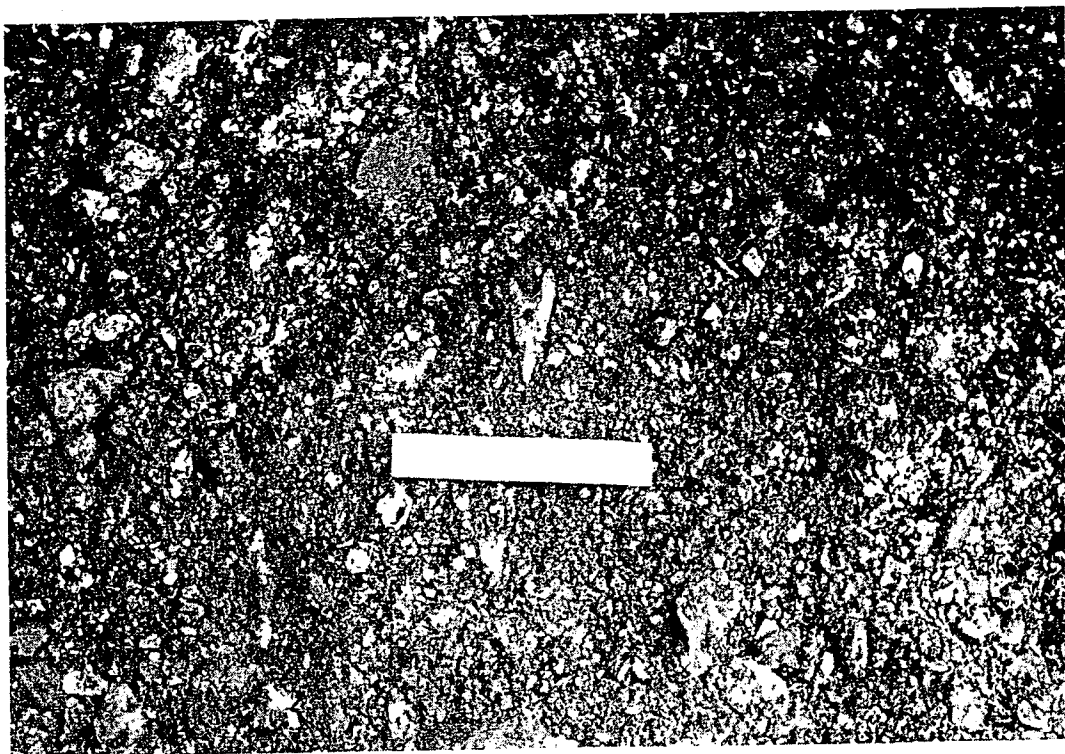
長さ8.4cm、巾3.5cm、厚さ1.1cm位の長楕円形石材の中央部を両側から削り取りヒョウタン状に加工したものである。表面のみ研磨しているが、その上に5条の刻み目を縦に等間隔に入れている。石錘であろう。砂岩製で全面に火をかぶったあとが認められる。

c 線刻絵画のある岩版 (第33図)

長さ3.8cm、巾3.2cm、厚さ5mmの石材を全面研磨し、表面に線刻絵画を施したものである。線刻絵画は何を表出しているものか不明である。石材は滑石で一边だけやや丸味を持ちカマボコ形に近い。護符的なものであろう。堀の内式に併行するものとされている。

第12図 VIトレンチ実測図





第13図 鹿角製鈎出土状態

D 骨角製品

a 鈎 針（第26図）

長さ4.4 cmの鹿角製鈎形鈎針である。先端に径5 mmの孔を穿ち上端には結着した糸のズレを防ぐため浅い溝を刻み込んでいる。両針の先端が僅かに欠損している。

b 鹿角製尖頭工具（第30図）

現在における長さ9.7 cm、径1.2 cm位の鹿角製工具である。先端はやや丸味を帯び鋭利ではない。随所に使用痕が認められる。基部は僅かに欠損している。

c 鹿角製品破片（第30図）

長さ3.2 cmの鹿角製品破片である。先端は鋭くはないが先尖り状を呈し表裏面には擦痕が認められる。前者同様尖頭工具の一種と見られる。

d 鯨骨製品破片

現在における長さは2.8 cmで先端は先尖り状に鋭利に加工され、断面は楕円状を呈する。鯨骨製で全面に研磨痕が著しい。小破片であるため原形の推量は困難であるが、おそらく前者同様と見られる。

e 鹿角先端部破片（2点）

長さ7 cm位の鹿角先端部破片である。先端には磨耗痕が認められるが果して使用痕か、或いは鹿自身の活動によるものか判然としない。

V 考 察

1 自然遺物について

貝類はカキ、アワビ、シウリ、レイシ、クボガイ、オオガイ等計17種類に及ぶが、これらのうちカキ、アワビ、シウリ、レイシ等が圧倒的に多く、しかもカキに至っては成育がよく大形の貝殻を残しているのがめだつ。今回はじめて発見されたオオガイの成育のよいことも注目される。これに比べるとハマグリ、アサリ、シジミ等は至って少く僅かに二三を数えるに過ぎない。これはいわゆるリアス式海岸を環境として持つ以上当然であろう。Vトレンチの東隅付近に焼けたシウリ貝の純粹な堆積層があったことは、すでに述べた通りであるが、このほかにも焼けたシウリ貝の散乱が各トレンチ毎に認められた。これはシウリを焼いて食したことを物語るものであろう。これを当時の食習といえるかどうかには疑問があるが、少なくともそのような食し方もあったことが想像される。現在においても、そのようなシウリの食し方を称賛する現地人がある。

魚類はマグロ、カツオ、サメ、スズキ、タイ等が主なものであるが、そのうち圧倒的に多いのはマグロである。その大小の脊椎骨は各トレンチから多量に発見された。いうまでもなく本島付近は三陸漁場の延長である。当時豊富な魚族に恵まれていたであろうことは容易に想像されるところである。本貝塚より出土した種々の漁具類も当然そのことを物語るものである。

哺乳類ではシカ、イノシシ、クジラ、クマ、キツネ、シャチ等が発見されたが、そのうちでもシカとイノシシが最も多かった。特に鹿角の埋蔵量は多く、本台地の反対斜面にある余名子館貝塚を遙かに凌ぐ出土量となった。注目すべきことは、これらの鹿角の大部分には截断痕や打痕等が多く認められたことである。鹿角を有効に利用しようとして真剣にとりくんだ状況が想像されて興味深い。クジラやシャチの発見は例外的で勿論本島においては、はじめての発見例となった。

鳥類はカモ・ガン等の水鳥類が主である。しかし全体の量は多くはなかった。IV A トレンチにおいては鳥骨のみが一箇所にまとまって埋蔵されているところがあったが、これは一体分ではなかった。本島における豊富な魚介類、哺乳類の存在は鳥類を第二義的なものとししか見なかったのであろう。

2 土器について

土器は次の4群に大別される。

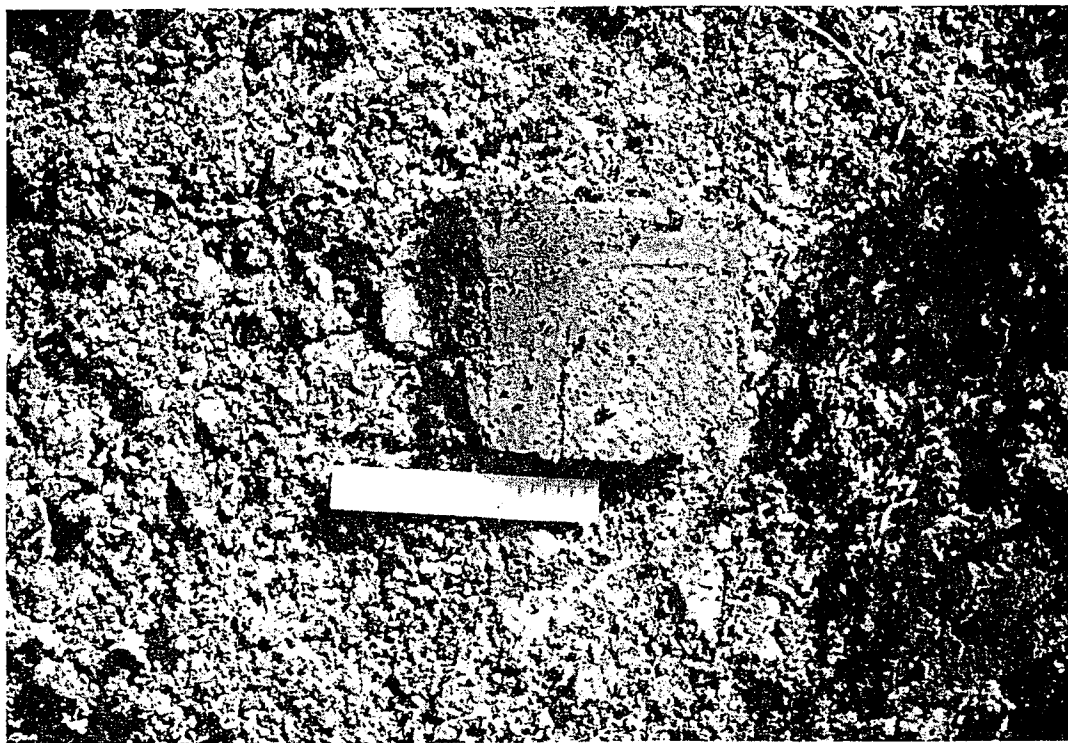
- I 群 堀の内式の比較的古い方に属するもの
- II 群 堀の内式
- III 群 加曾利Bの古い方に属するもの
- IV 群 大木1・大木2A・大木3

(出土量順)

出土量はI群が63%で最も多く、II群が26%、III群が8%、IV群が3%の順となっている。従って本貝塚の時期は縄文式文化時代後期初頭に相当することになる。

I 群 の 特 徴

器形はすべて鉢形で、口縁部が外反するものと内湾するものがある。この群に属するものの中には一部粗製のものもあるが、器形の特徴はほぼ同様である。文様は隆帯・条線・擦り消しを組み合わせたものが多い。口縁部と頸部の間には列点を施して区別し、口縁部は擦り消している。文様帯は横に展開するものが多く縄文の施文法には糸をコイル状に巻いて縦に回転したものが多いが、横に回転しているものも一部見られる。又主として口頸部に径約1cmのボタン状突起を2～3個貼り付け、その中央部を棒状工具で突き刺しているのも特徴としてあげられる。口縁部に山形突起を有するものが多いが、片口状のもの或いは取っ手状のものが山形の部分に付加されているものもある。取っ手の場合、内外両面から窓をあけているが、これは紐通し用とか、懸垂土器等といわれる。又口縁部の一部に粘土のはげ落ちたあとを残しているものが見うけられるが、これは粘土を貼り付けて研磨したためであって、これもこの時期の特徴の一つとしてあげる説もある。粘土には雲母、石灰粒の混入が多い。従って再酸化した土器は白色を呈している。これらの土器群を器形の上から見ると中期に近い。むしろ中期の伝統を保持しているといえる。しかし精製・粗製の別が現われていることは後期の特徴で、縄文後期ここに始まるの感が深い。



第14図 土器出土状態

Ⅱ 群 の 特 徴

いわゆる堀の内式に併行する土器群である。これは関東より、東北一帯を包み更に津軽方面へまで及ぶ文化である。この土器群の特徴は条線が文様の主体をなし擦り消しとその間に点綴している。そして頸部から底部近くまで研磨されているものが多い。又大きな菱形の中に三個の長楕円文、又はS字状文が連続している場合もある。器形は胴部がふくらむかX字状を呈するものが多い。尙この群に属する土器には雲母や石灰の含入は極めて少ない。

Ⅲ 群 の 特 徴 (第21図9~12)

これは加曾利Bの古い方に属するもので、縄文は任意の方向に施文され、口頸部には列点の突帯が2条めぐらされている。器形は浅鉢が多い。

Ⅳ 群 の 特 徴 (第21図1~8)

この群には僅か数片ずつに過ぎないが大木1・大木2A・大木3等が含まれる。

破片によって特徴を推量すると、大木1の器形は円筒形深鉢形で、口縁部は直立し、底部は平底であろう。多量に禾本科植物性繊維や石英粒を含み、撚りのきつい羽状縄文を回転している。

大木2Aは口縁部の直立した砲弾状深鉢で、撚糸文が認められる。粘土には多量に禾本科植物性繊維及び石英粒を含入している。

大木3は深鉢形で斜行縄文を施し、貼付文を付している。繊維の含入は認められない。粘土には石英粒が混入している。

尙Ⅰ群とⅡ群は、それぞれ分離独立させて2形式とすることも可能であろうと思われるが、前述の通り両者は後期的要素を濃厚にそなえているから共に堀の内式としてまとめ、これに先後の差を付す方が妥当と思われる。従って本貝塚は縄文式文化時代後期の初発期を中心に形成されたものと見られる。

3 貝塚の規模について

すでに第一次調査報告書において指摘したように当地方における貝塚は概して貝層が貧弱で規模も小さいことが特徴としてあげられる。これは当地方が岩石海岸であることに起因するものであろう。すなわち三陸海岸段丘上に発達した貝塚にはカキ、アワビ、シウリ等のいわゆる真珠質の貝殻が多い。これはその性質上、粉碎され易く粉状になって流失してしまう場合が多い。この点内湾性貝塚におけるシジミ、ハマグリ、アサリ等のアルカ属の貝が蓄積され易いのは対照的である。当地方における貝塚が概して貧弱な貝層を示しているのはこのことに起因するのであろう。又当地方における貝塚が一般に小規模であることもやはり、この地方特有の岩石海岸の故であらう。出島から雄勝までは約1時間20分の航程である。この間沿岸の各地に貝塚が見られるが、いずれも小規模で、貝塚の名称を以て呼ぶことに躊躇する程である。しかし数は多く、小規模のものが近距離の間に点在している。これは断崖が直ちに海に迫る不整地が多いため人々が僅かの好所を選んで分散居住した結果であらう。

4 貝塚の占める標高について

本島内における貝塚は本貝塚にせよ、反対斜面にある余名子館貝塚にせよ何れも相当の海拔高度を示している。更に本島内において貝塚の存在が想定される他の地域においても本貝塚同様25m~30mの高度を保っている。これは当然住居を営むべき平坦地の存在とも関連があるであろうが単にそれだけではなく当時における水位とも密接にかかわって来る問題であろう。当時の水位は現在より高かったことが指摘されているから当然住居もそれに制約されて高い標高を占めることになったのであろう。本島のみならず当方面における貝塚群の標高を線で連ねて行けば当時における当方面の水位を或る程度想定することも可能であろう。又土木技術の発達を見なかった当時においては高所に居を占めることが津浪・高潮等の海難を避けるための唯一の方策でもあったと思われる。今日、見上げるばかりの高所に貝塚が存在するのも決して偶然ではないであろう。本遺跡においては住居はおそらく半島状台地上の平坦面に営まれていたものと推定される(標高約29.3m)が現在は畑地と化しているため地主の了解を得ることも困難で、今直ちに調査に踏み切れる状況にはないが、その面積は約19aに及ぶ開闊高燥な住居好適地である。

5 いわゆる土錘・石錘について(第38図)

土錘とは土器片の周囲を打ち欠き、更に研磨して径3.5cm位の円盤状に形を整えたものである。これらには大小の差は多少あるが、ほぼ同大といってよく、規格性が見られる。糸掛けと思われる部分を残しているものがあるので土錘とする説がある。しかし今回の調査において発見された計74点(表土採集の円形2点を含む)の中には長方形のもの5点、二等辺三角形又は盾形に属するものが6点含まれていた。又中には周囲だけでなく表裏面を研磨しているものもあった。若し土錘として糸を結着することを考えた場合四角形が形態上最も適したものというべきで三角形又は盾形の場合は全く不適当な形態といわざるを得ない。わざわざ三角形まして盾形などに加工すべき必要性は認められない。又土錘として糸を結着することを前提とするものなら特に円盤状に加工して糸掛けをつくる必要もなかったと考えられる。更に今回発見した数点の中には表裏面を入念に研磨したものも含まれていた。若し土錘という実用性の高い漁具ならば、わざわざ表裏面まで研磨する必要もなからう。又円形の場合糸掛けと思われる部分を残しているものもあるが、その全くないものも同数認められる。従ってこれらを以て土錘とすることは早計であろう。筆者は土錘説にとって代わるべき説を持たないが少なくとも本遺物の「用途」に関しては更に検討の必要があるであろう。

更にこれらの遺物の出土状況を見ると長方形・二等辺三角形・盾形等に属するものは比較的下層から発見されている。円形又は、その多少変形したものは必ず前者より上層において発見された。長方形・二等辺三角形・盾形のもので1点でも円形と併存しているものはなかった。これら少数の例を以て直ちに本遺物の時期区分をしようとは考えないが今後に予定される同貝塚の発掘調査において、このことには特に留意する必要があると思っている。尚これらの土製品の作製に当っては必ず1時期前の土器片を材料として使用しているとする説のあることを付け加えておく。

又黒色砂質粘板岩の丸小石の中央部に6mm×7mm位の長方形の穿孔を有するものがある。いわ

ゆる方孔石と呼ばれるものであるが、これらと同類のものは本島の汀線付近でしばしば発見される。地学専攻者の教示によれば、これらは自然発生的なものらしいという。しかしこれらが包含層から発見される以上、何かの目的に使用されたと見てよいであろう。しかも現在、汀線付近で発見される同類のものは大きさ、形状も種々であるが包含層から発見されるものは径4cm位の丸小石であり、又重量も17~18gとほぼ一定している。そこには規格性があり、ほぼ同一規格のものを選定しているように思われる。これは魚錘として使用されたものであろう。

6 貝輪状ユキノカサ製品について

長径4cm位のユキノカサを加工し、貝輪状に仕上げたものがある。内径はいずれも3cm位で切断面はよく研磨されている。貝輪の常識から考えれば余りにも小さ過ぎるから1個又は数個を紐に通して垂飾具として使用したものであろうと考えられる。しかし今回の調査に際して現生のユキノカサを現地において採取し、これを用いて実験を試みると僅かの衝撃によっても殻頂の部分容易に脱離することが判明した。従って今回の調査において発見した全部を人工的な遺物と考えることは不可能である。しかし中には截断面を入念に研磨して5mm内外の巾に仕上げているものもあるから、これらすべてを人工の加わらない自然物として無視することは出来ないであろう。やはり研磨の手が加わり美麗な出来栄を誇示しているかに見えるものは、やはり前述のように装身具としての意味を持っていたものと考えなければなるまい。

7 村落の規模について

当時この地には多数の人々が居住していたことが考えられる。それはこの貝塚に限り貝殻その他の堆積範囲が広い面積に及んでいること、及び同時期に属する出土品が多量に発見されることによっても知られるが、又魚錘の出土量が意外に多いからである。勿論これらは漁網の使用を物語るものであるが漁網の操作に当っては多人数による協業が必要である。又漁網による漁法は多収獲をめざすものであって、これは多数の消費者の存在を前提とするものである。この貝塚から出土する魚錘には石錘と土錘がある。前述のように土製円盤については問題があるが、それらを除外しても意外に多数の魚錘を出土している。この地においては漁網による漁法が活発に行なわれ、多くの人間がそれに参加し、又それによって養われていたと思われる。網の作製にかけては縄文時代人は優れた「技術師」であったことも人の認めるところである。

8 対外交流について

この島は外部との交流が意外に活発であったと思われる。元来この島には黒耀石は勿論、石器の材料となる原石は存しない。しかしこれまでに於ける石器の出土量は多く、又種類にも富んでいる。これは当時、この地において石器の生産が行なわれていたことを示すばかりでなく原石を他地方から運搬、移動していたことも同時に示すものと考えられる。浮子の材料となった軽石はこの地では求められない。又余名子館貝塚出土の骨角器に付着していたアスファルトなどは勿論他地方からの移入品である。この島と外部との交流は意外に活発であったのである。それだけに本島における文化は種々の面でバラエティーに富んでいる。

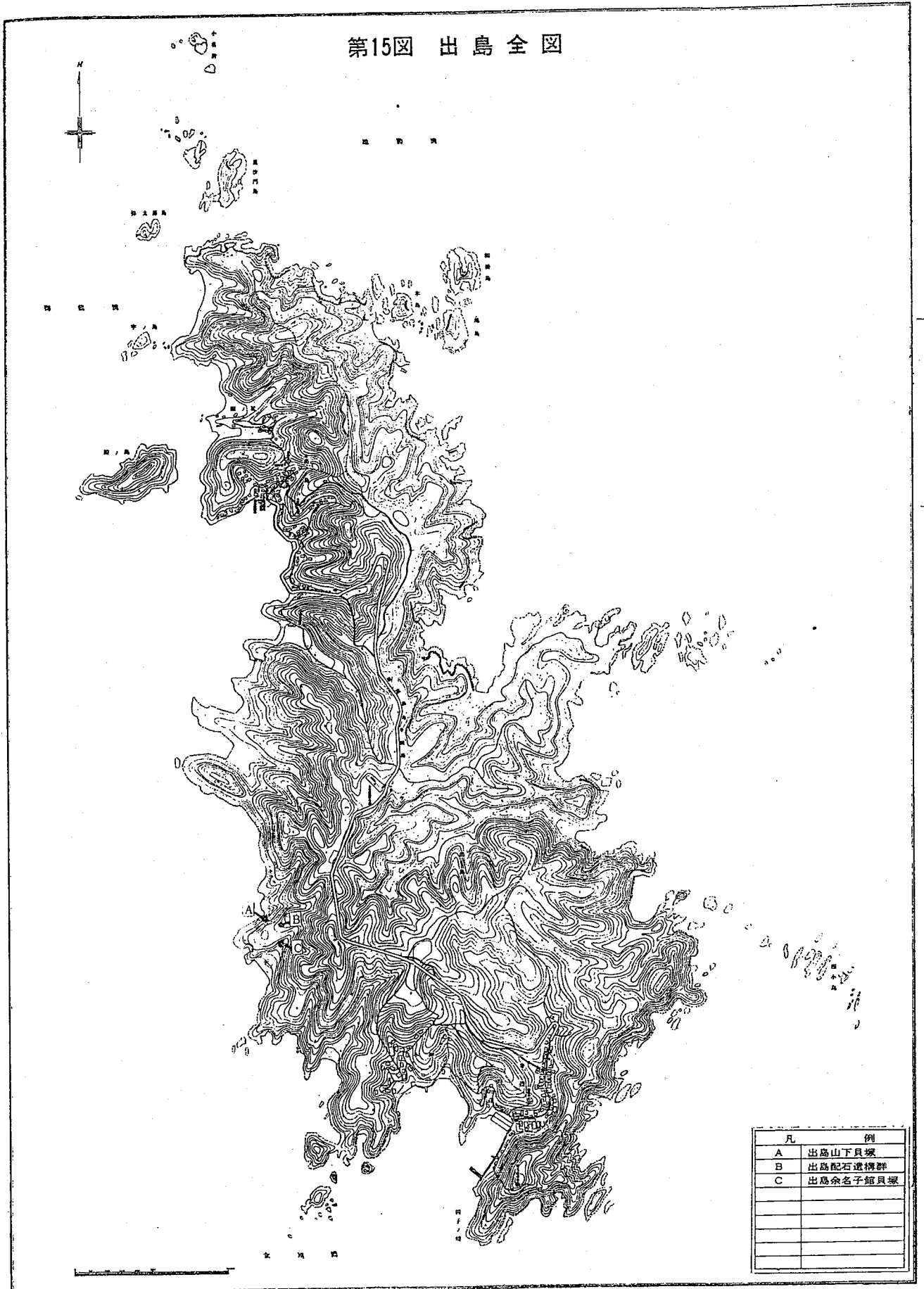
9 祭祀用遺物について

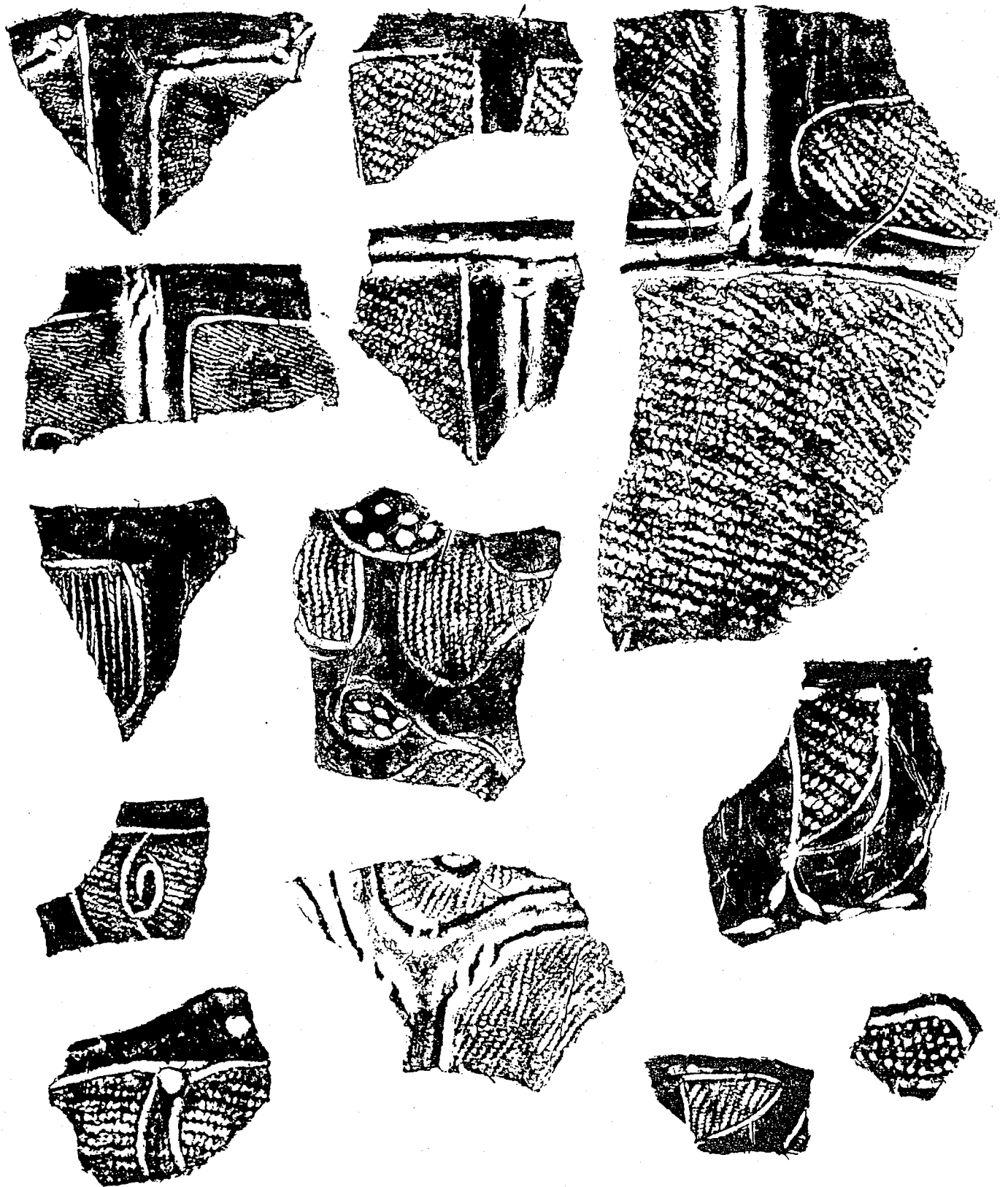
この貝塚より滑石製護符・骨刀・装身具類・石棒等が発見されたことは注目に値する。これらは勿論実用品とは見られず、祭祀用又は宗教用具と見られるものであって、これらの出土は当時この地において宗教活動が活発に行なわれていたことを想像させるものである。本台地上にある、いわゆる「出島配石遺構群」は、その出土遺物より見て縄文式文化時代後期より弥生式文化時代初期にわたるものと考えられる。そうすると前述の祭祀用遺物は、これら遺構群と時期を共にすることになり両者相俟って当時の活発な宗教活動を暗示しているものと思われる。配石遺構群に包蔵されていた大形石棒や石刀も、このことを証明して余りあるものである。

付 記

前述の通り、この台地上は平坦面をなし現在は畑地として耕作されている。これは本島における数少ない平坦面の一つであるが、先史時代においては、おそらく唯一の平坦面であったかも知れない。しかもこの台地の両側、下方には余名子館浜があって海にも出やすく、その反対方向へ向えば直ちに深い山にも入ることが出来る。更にこの付近には湧水もある。海・山の幸にも飲料水にも恵まれた生活の好適地であったことは疑いない。人々は縄文時代早期より、この地に住みつき土師器須恵器の使用される奈良・平安時代に至るまで継続して、この地域に住みついていたのであろう。勿論これらの期間全体を裏付ける、すべての土器形式が揃っているわけではない。そのところどころは欠如しているが、しかしその期間だけ人々の生活の営みが断絶したとは考えられないから当然この地域に継続居住したものと思われる。このたびの貝塚調査に際し、この半島状台地の突端近くに経塚らしいものが存在することも判明した。そうするとこの地は縄文文化時代早期より鎌倉・室町時代へ至るまで遺跡・遺物によってあとづけられる由緒深い地域となるのである。

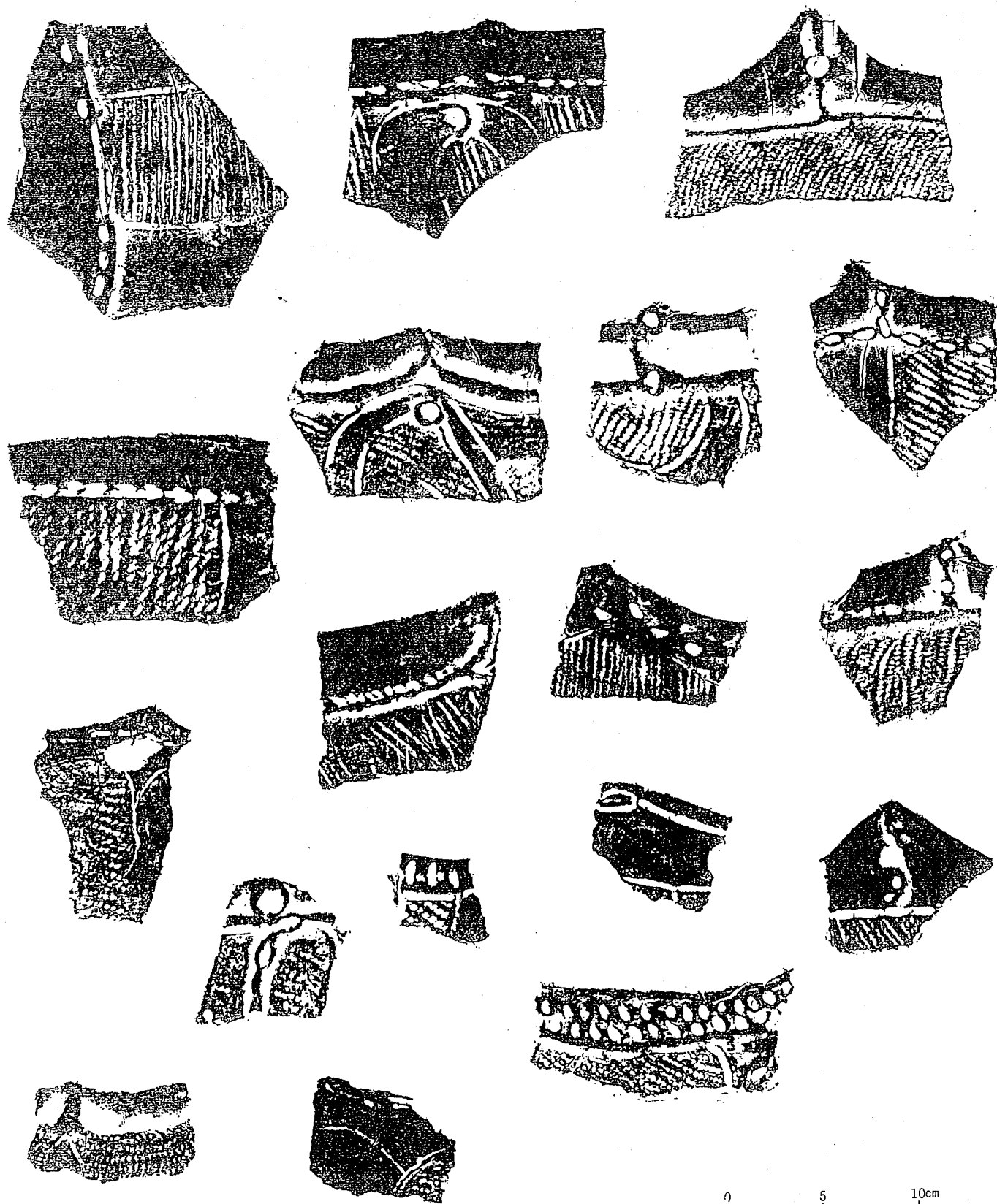
第15図 出島全図



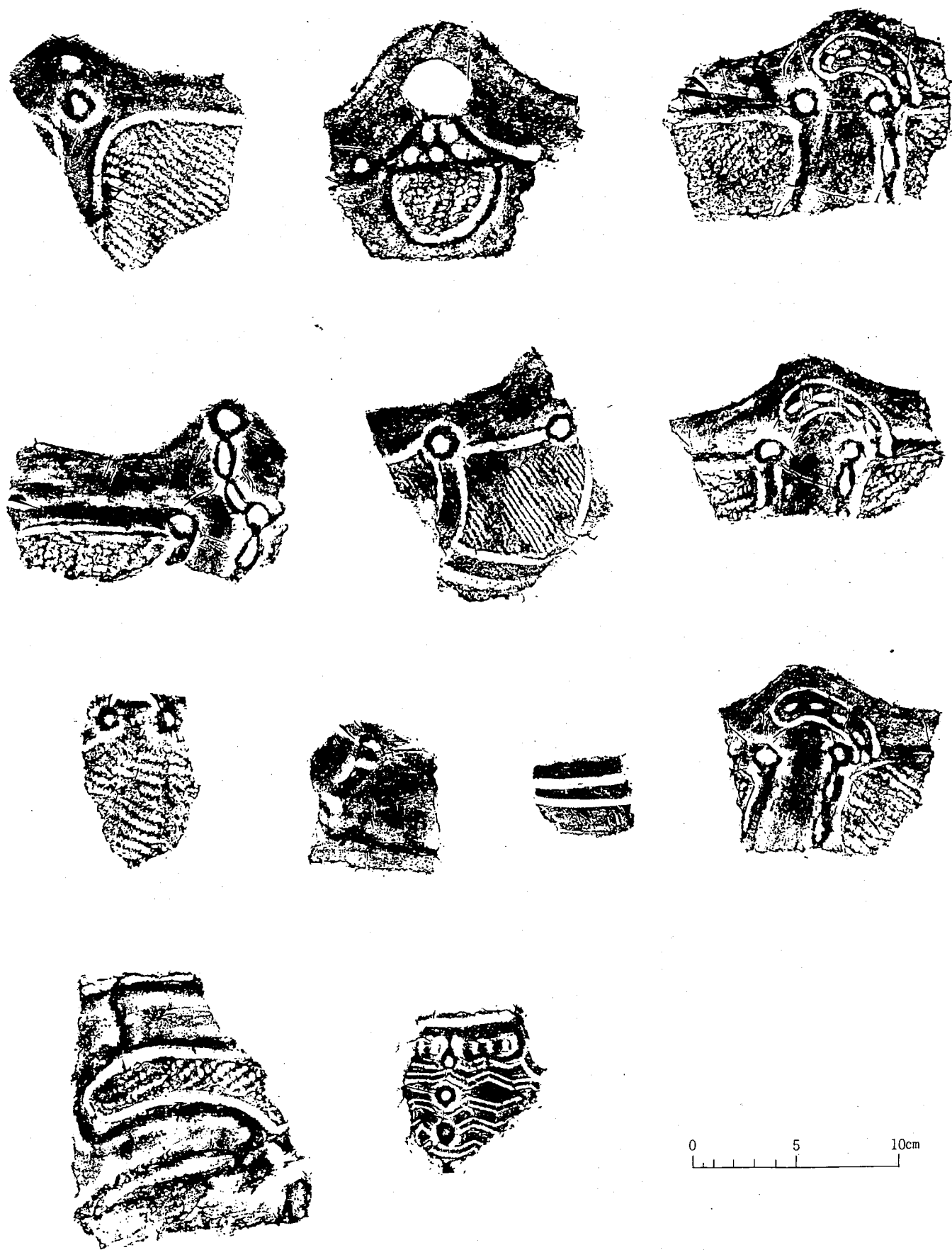


0 5 10cm

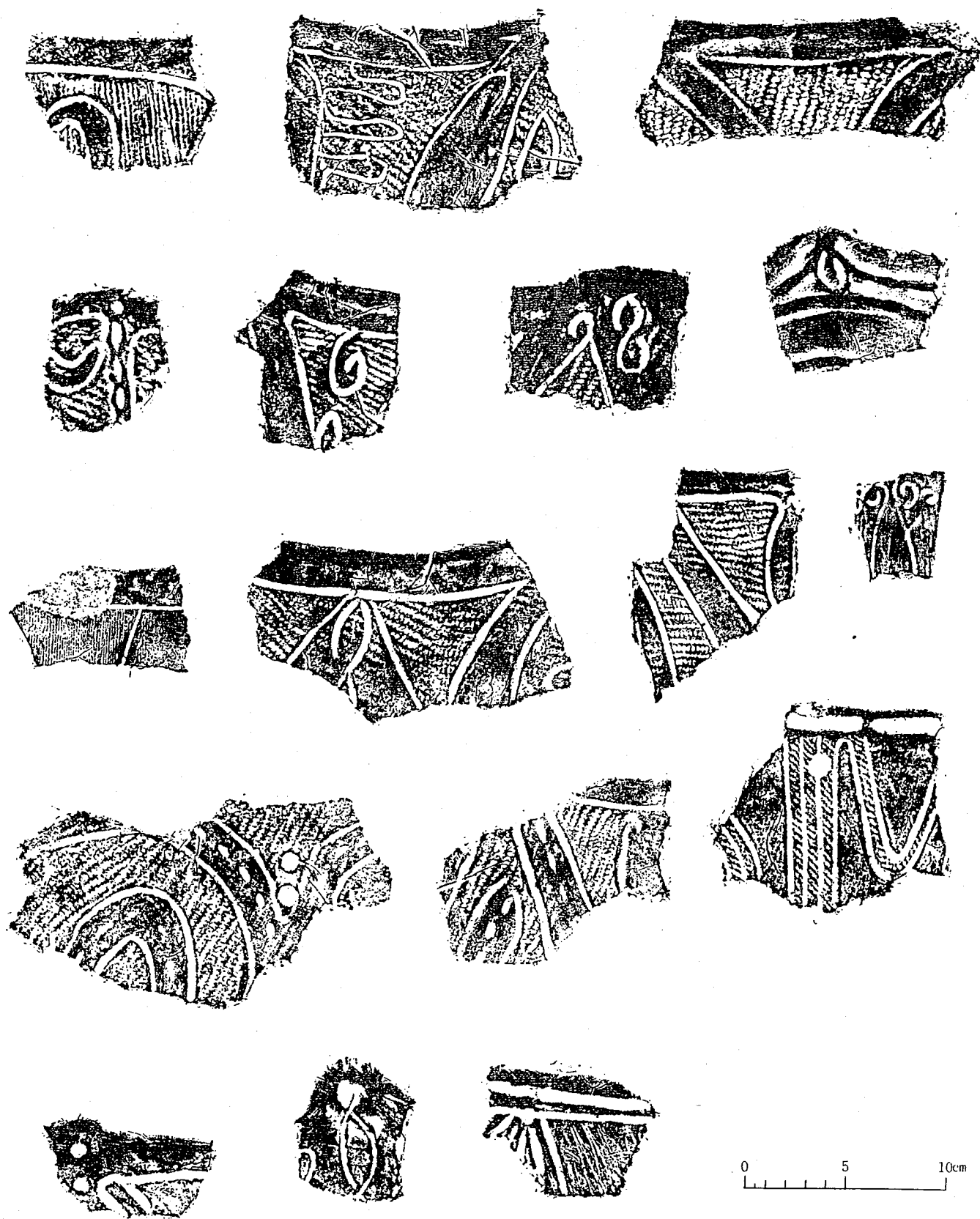
第16図 土器拓影



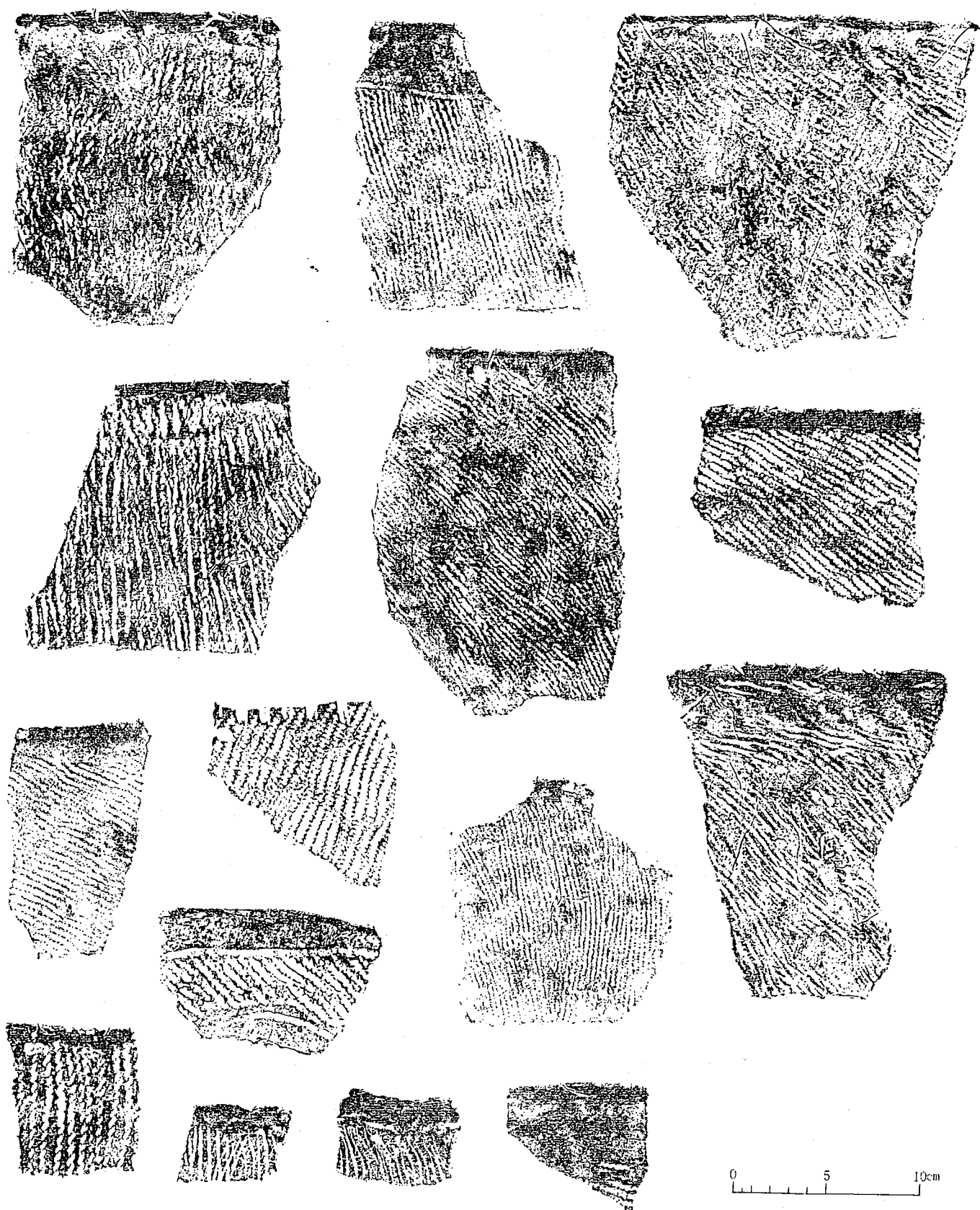
第17图 土器拓影



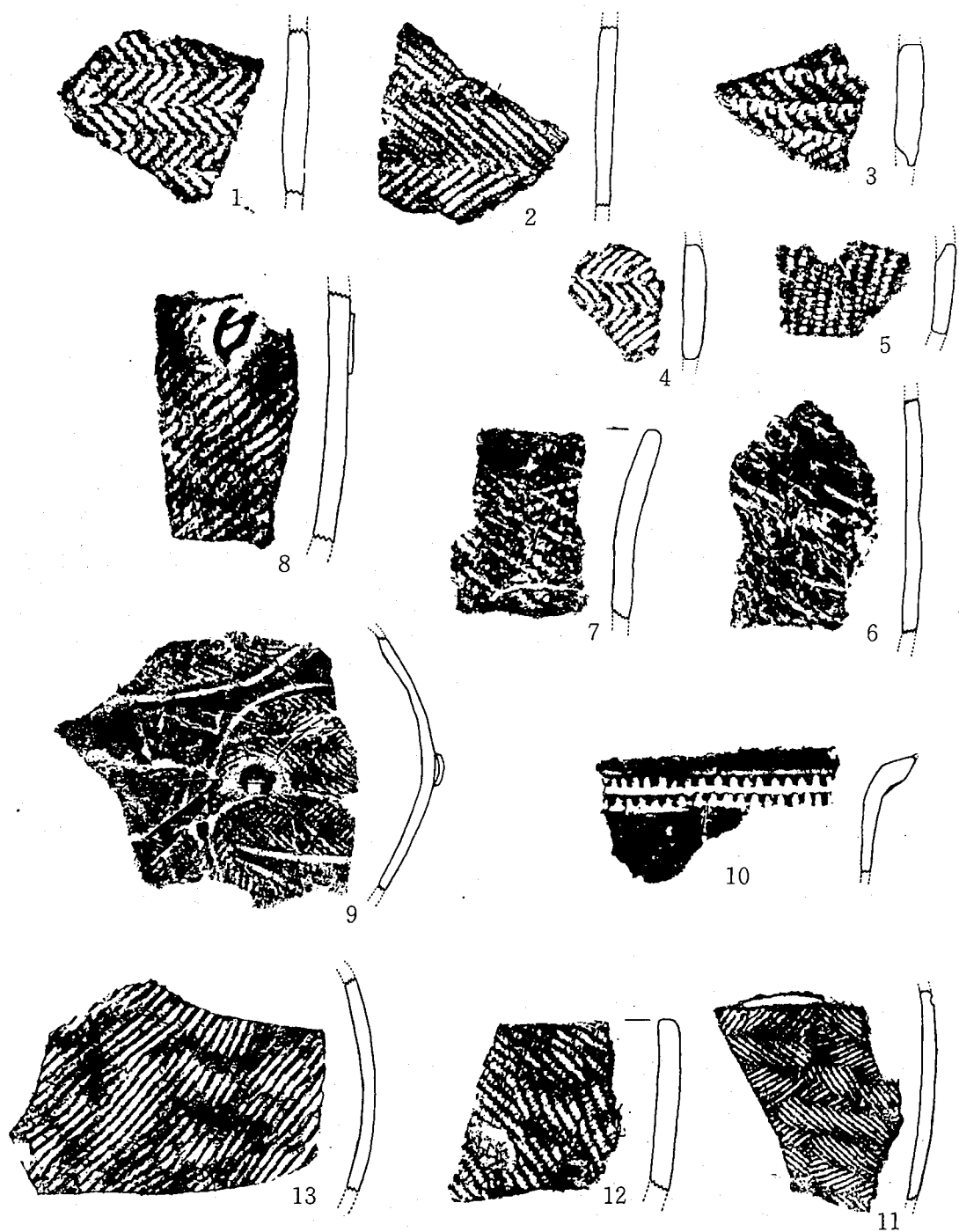
第18图 土器拓影



第19图 土器拓影

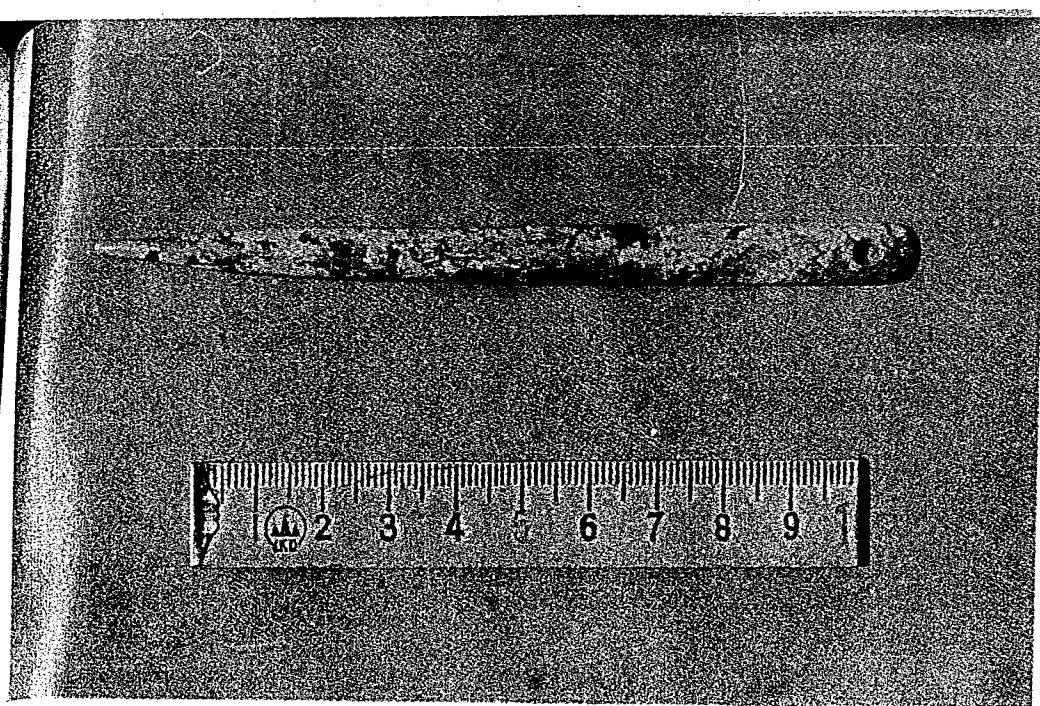


第20図 土器拓影



0 5 10cm

第21图 土器拓影

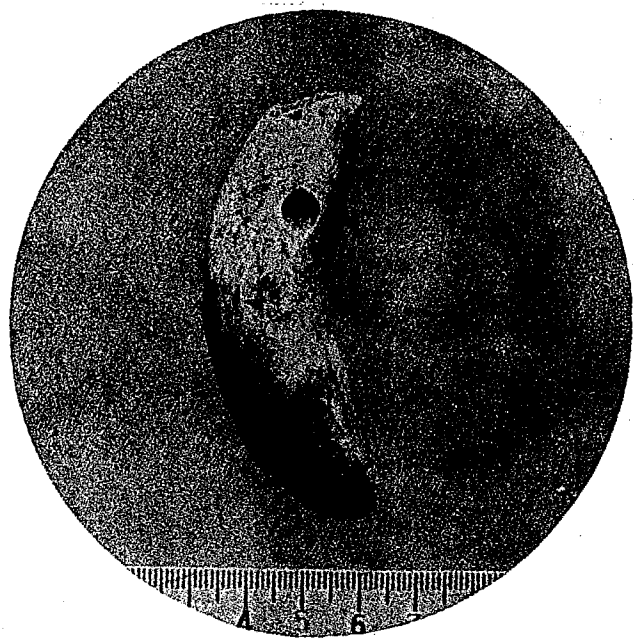


第22図

鹿
角
製
針

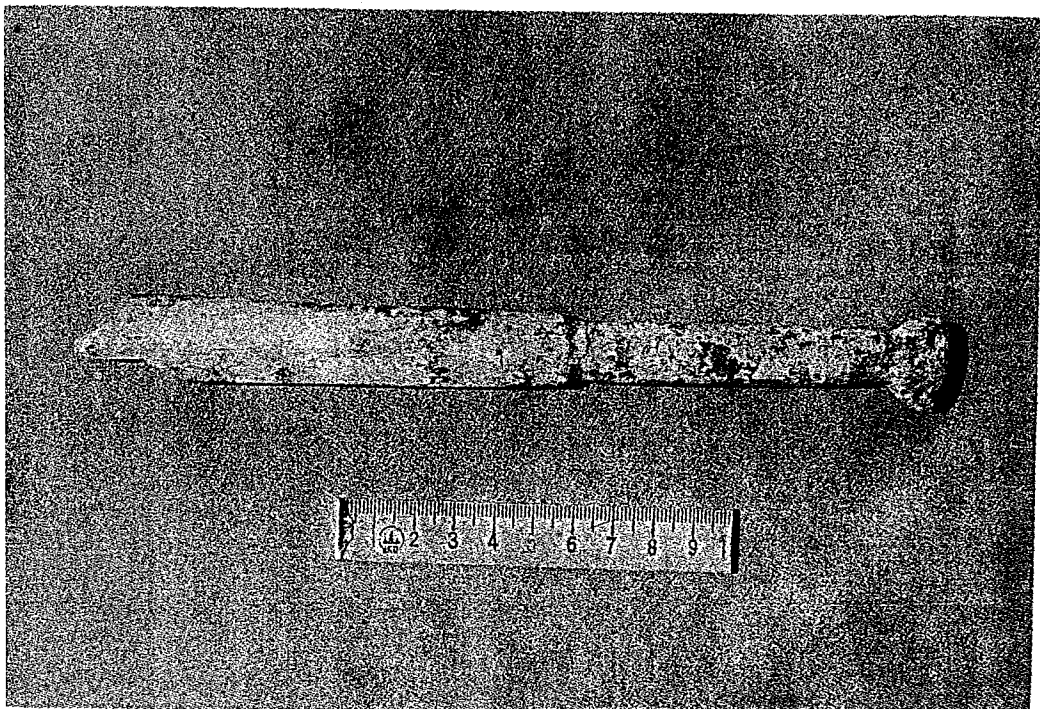
第23図

垂
飾
装
身
具



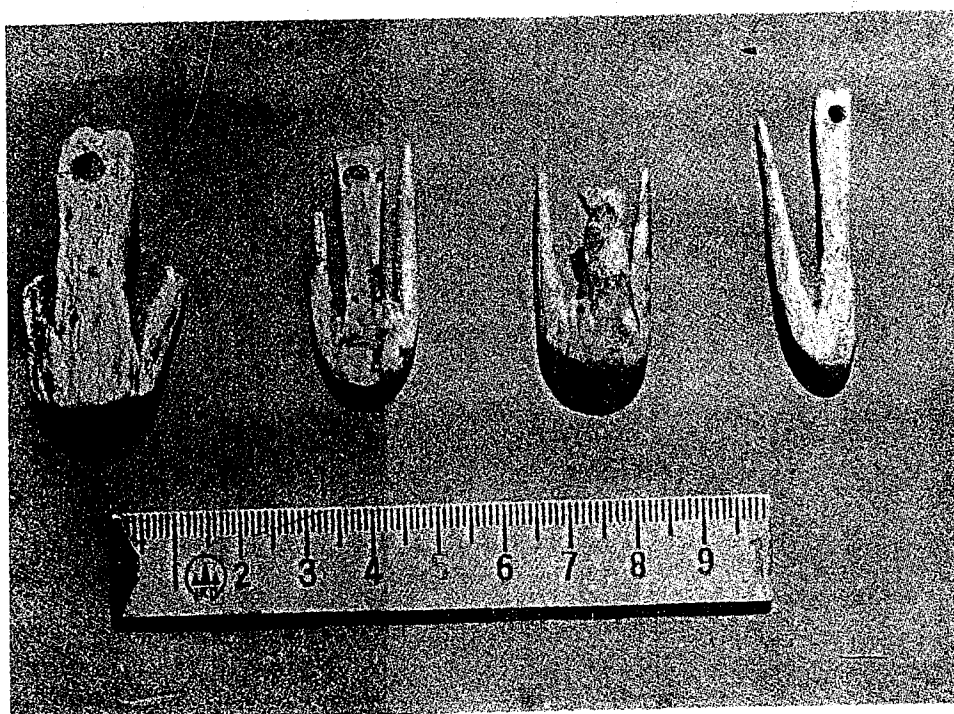
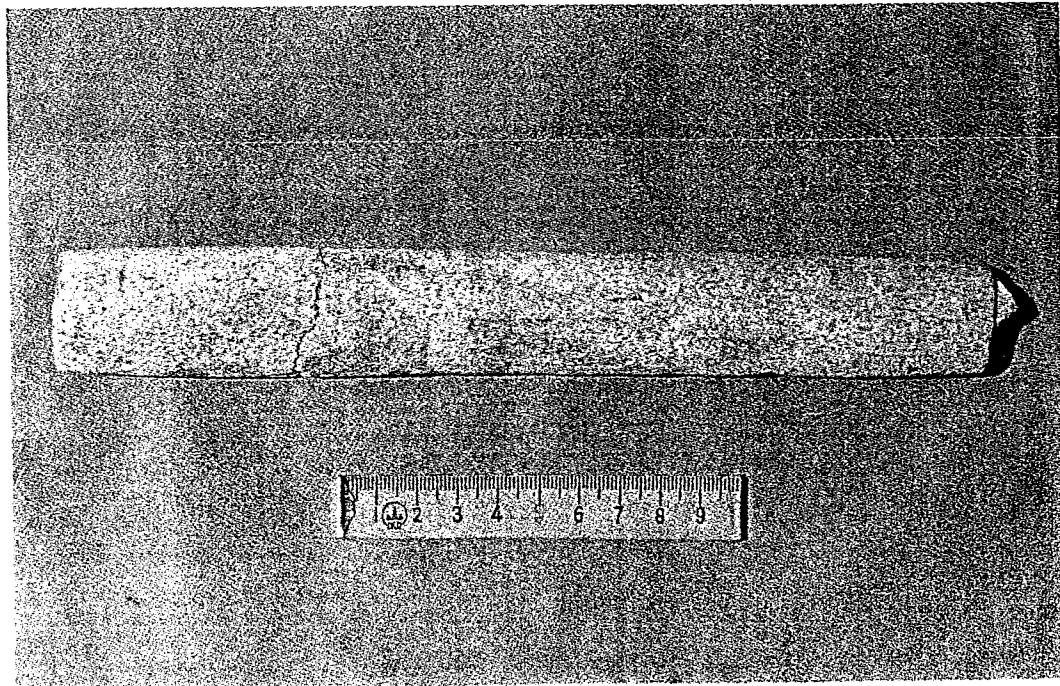
第24図

鹿
角
製
骨
刀



第25図

鹿角製骨刀

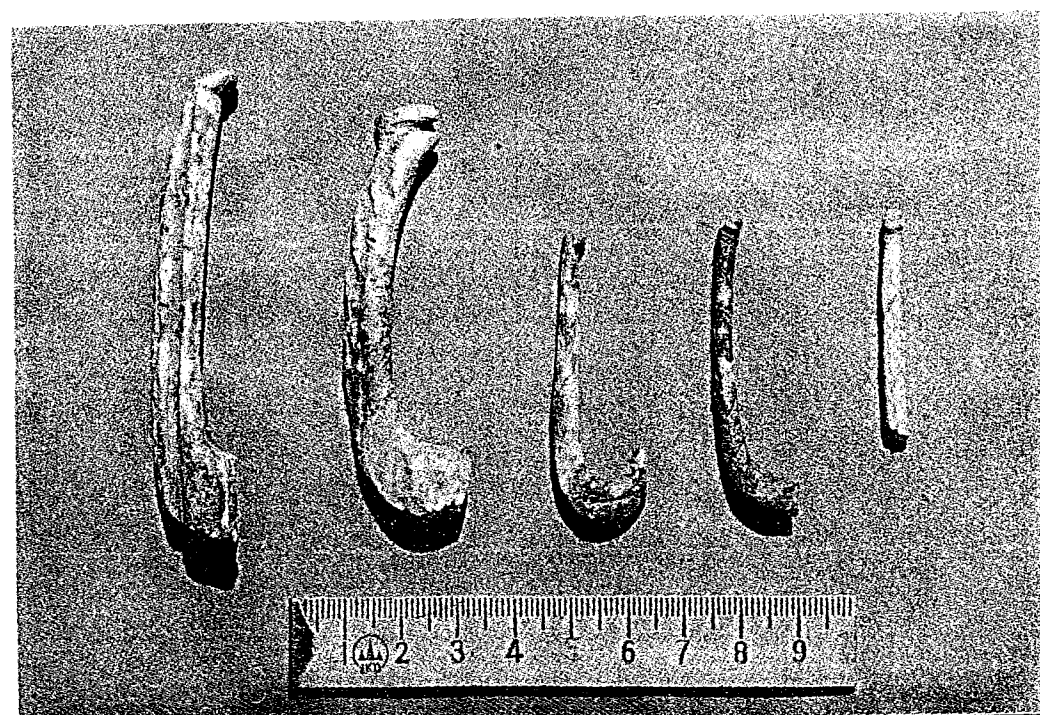


第26図

鹿角製釣針

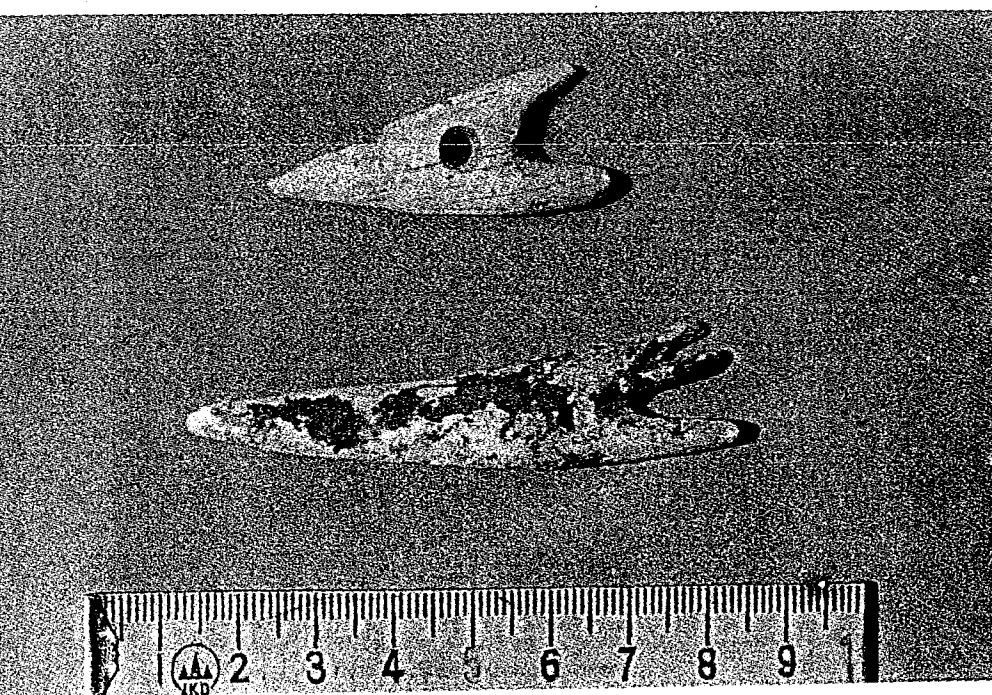
第27図

鹿角製釣針破片



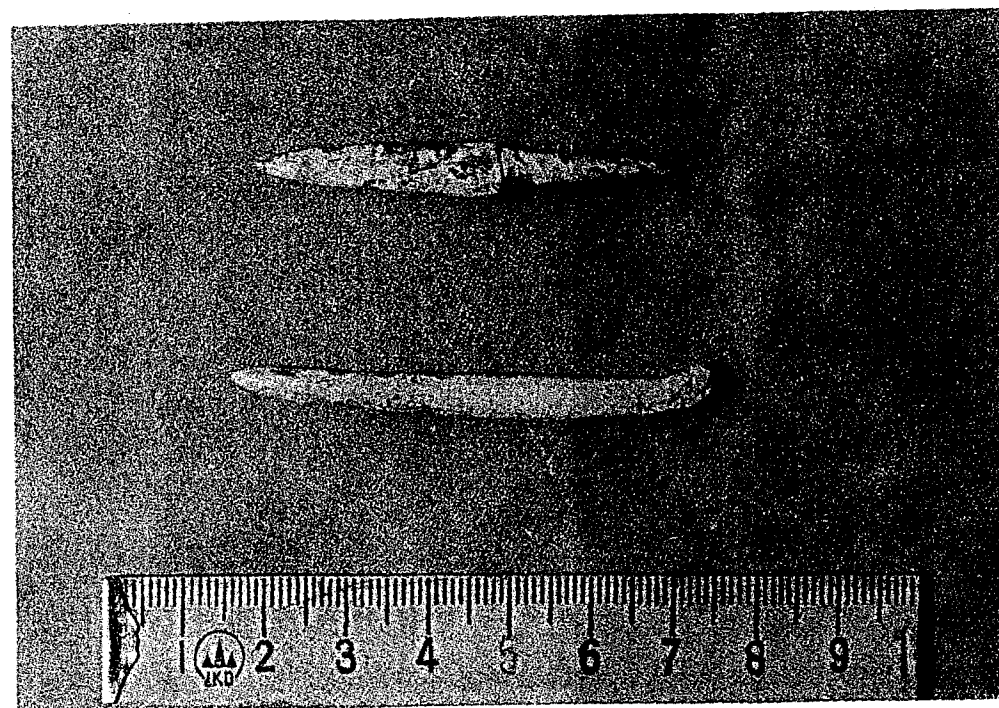
第28図

鹿
角
製
鈎



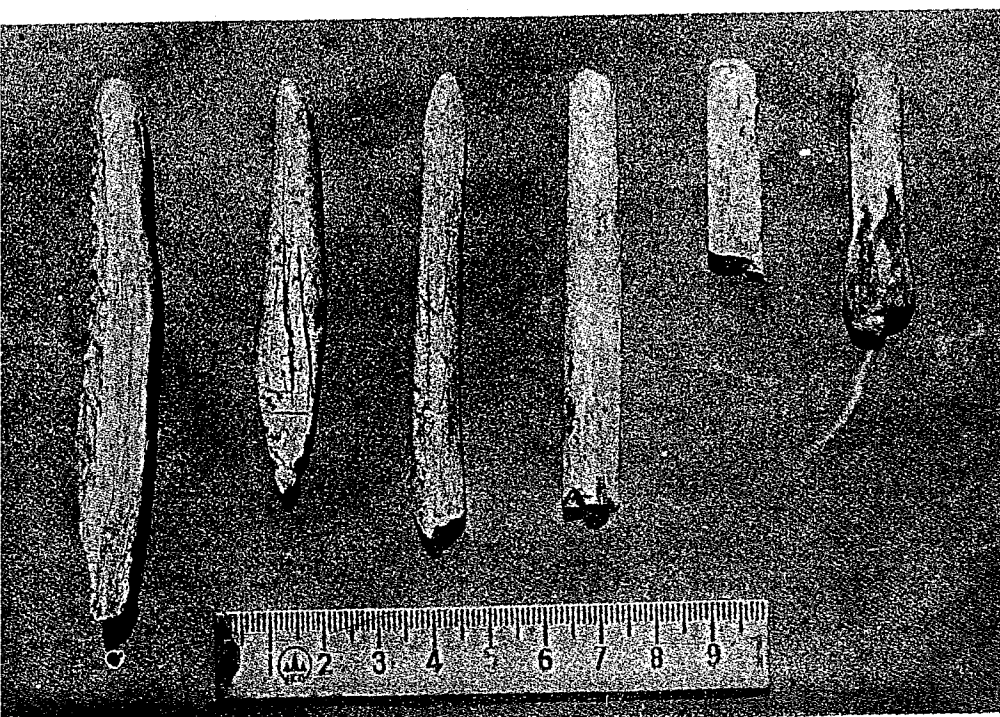
第29図

鹿
角
製
鏃



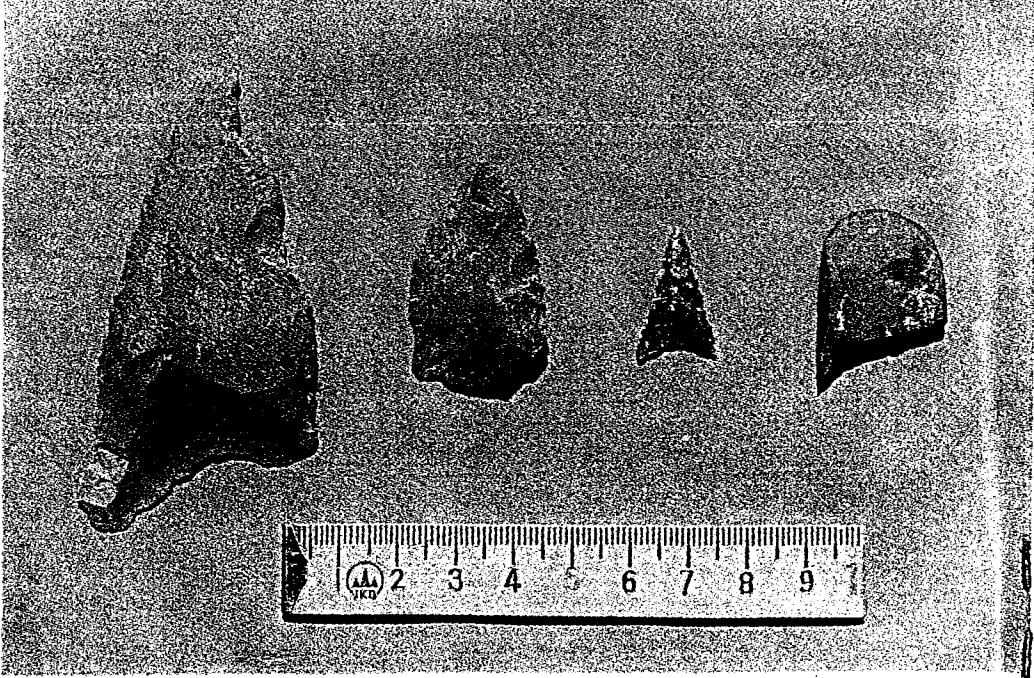
第30図

鹿
角
製
尖
頭
工
具



第31図

石匙・石鏃等



第32図

凝灰岩製垂飾具



第33図

滑石製護符

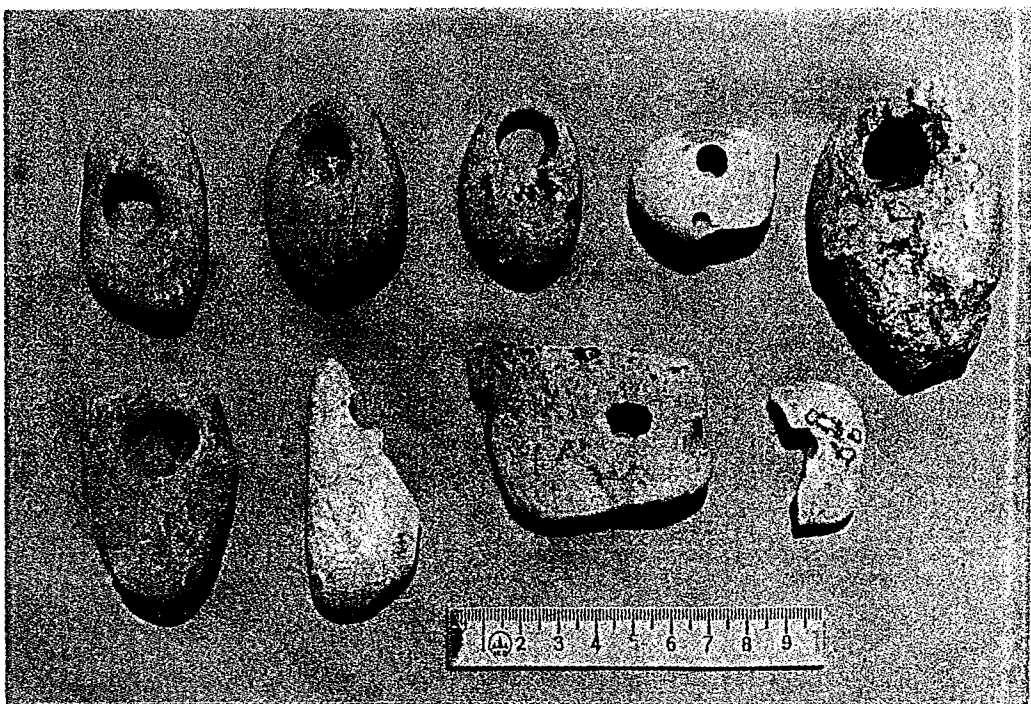


0 2 cm

滑石製護符

第34図

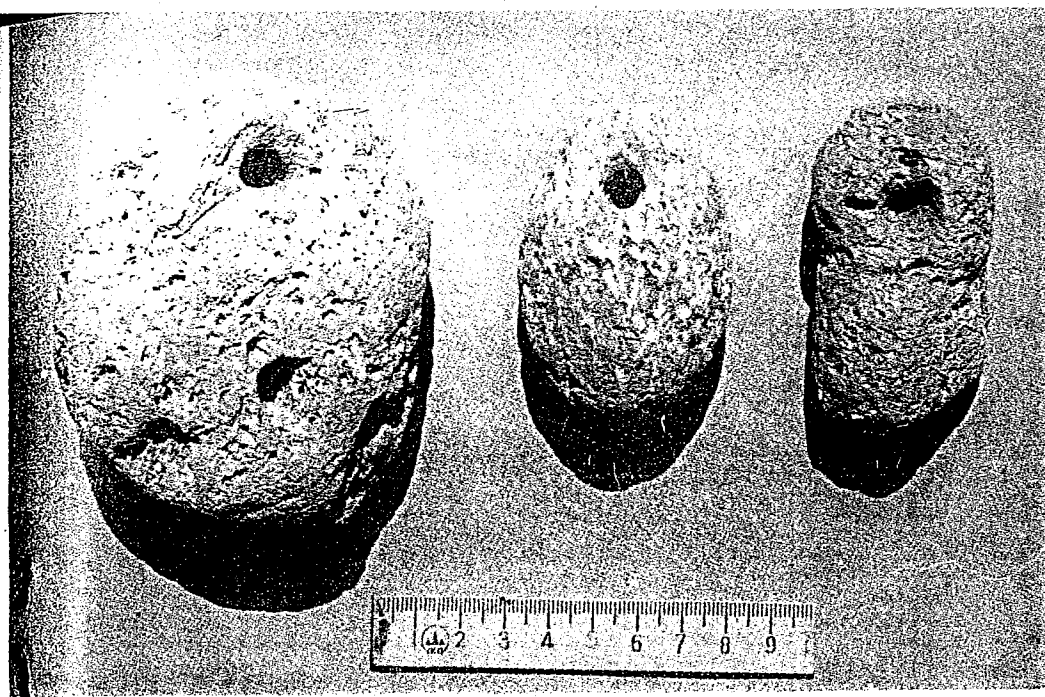
石
錘



第35図

浮

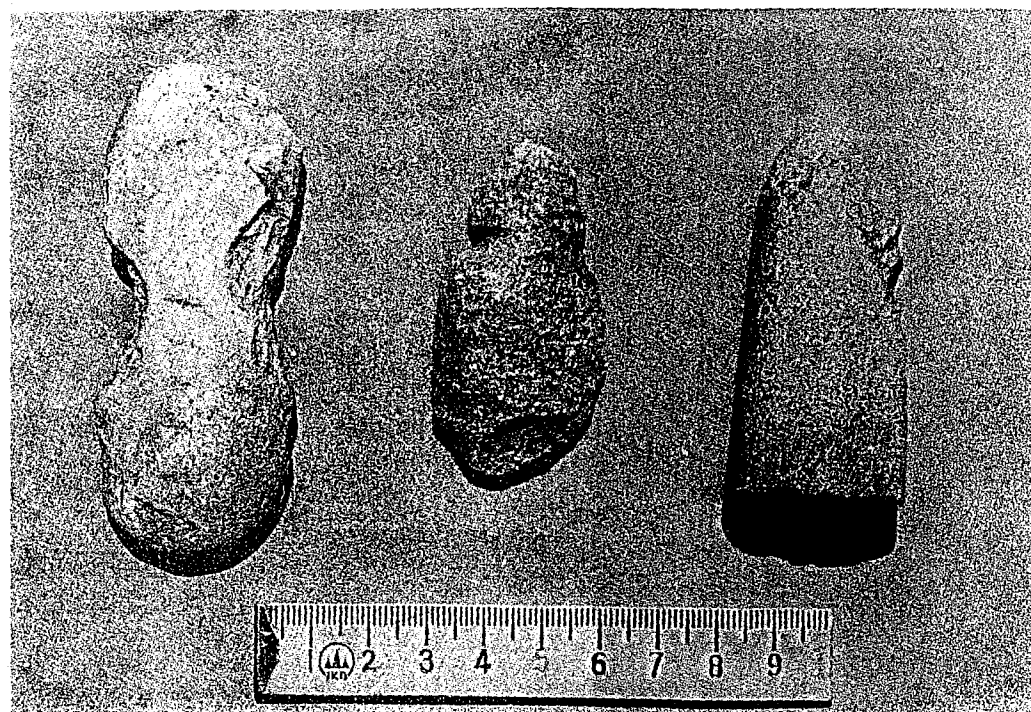
子



第36図

石

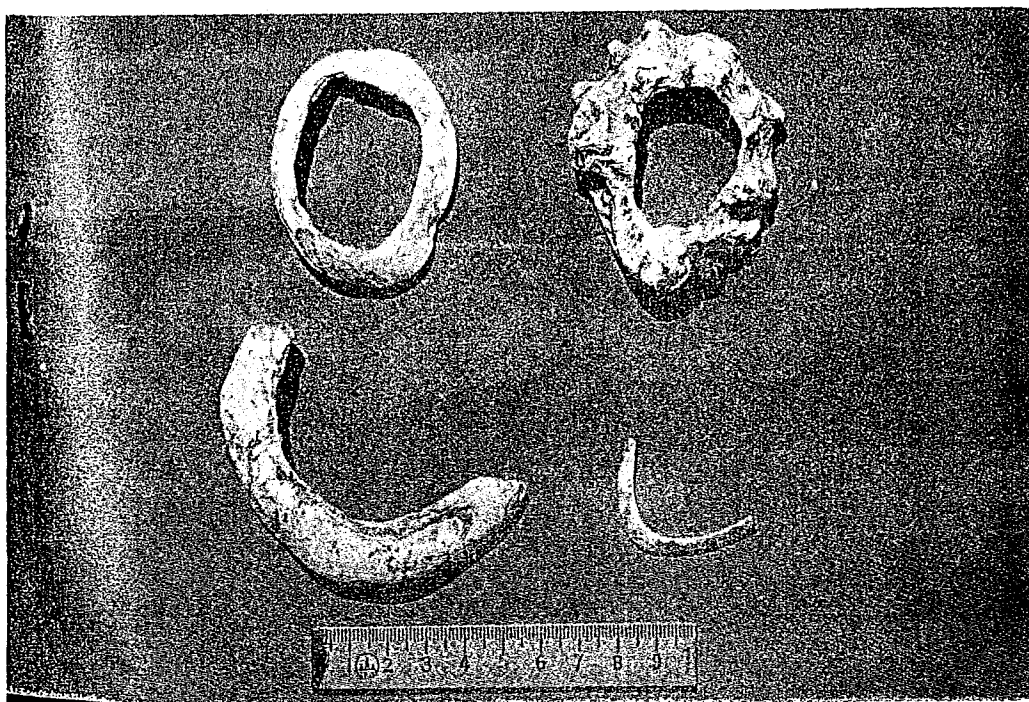
錘



第37図

貝

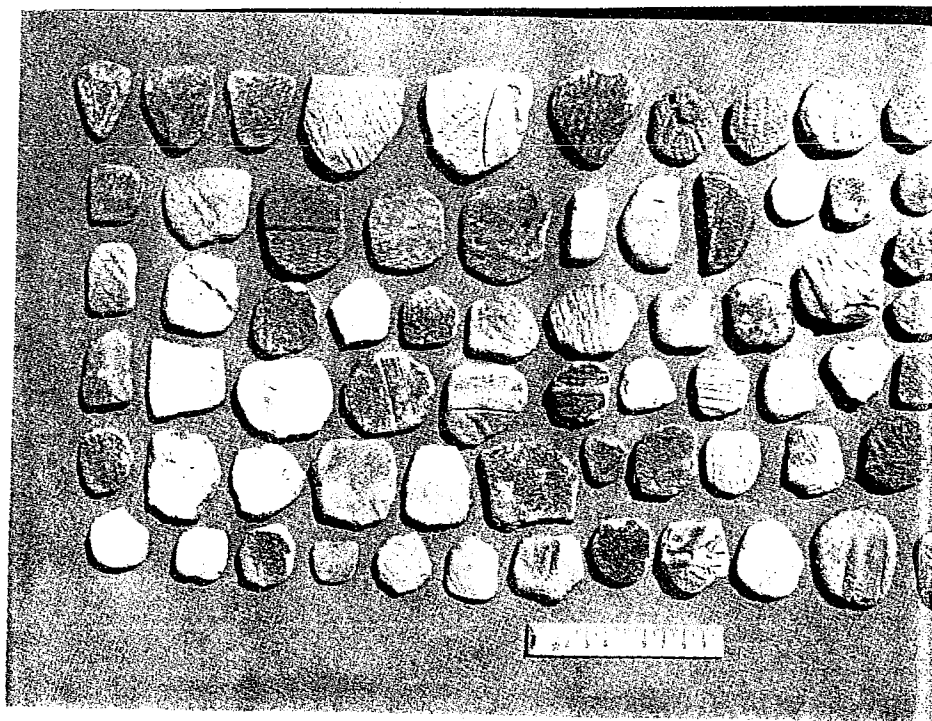
輪



第38図

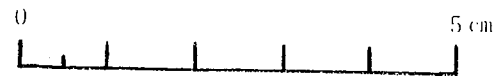
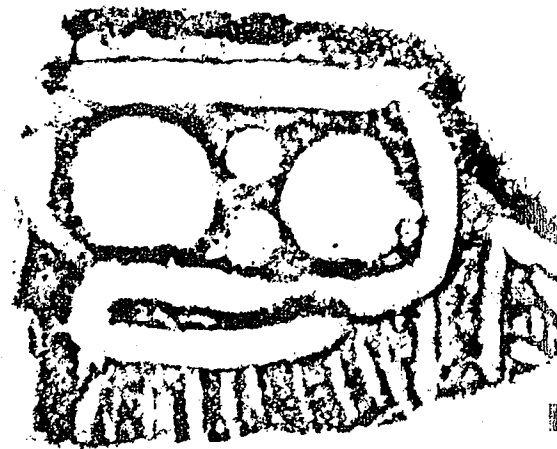
土

錘(?)



第39図

顔
面
把
手



第40図

石

棒

